多賀城市文化財調査報告書第58集

西　沢　遺　跡

―第 8 次調査報告書―

平成 12 年 3 月

多賀城市教育委員会

序　　文

多賀城市には、現在37ヶ所の遺跡があり、その総面積は実に市の１/４にも及んでおります。遺跡は私達にとってかけがえのない文化遺産であり、かつ後世に伝えることが重要な責務であると考えます。

さて、当市は特別史跡・多賀城跡を有し、その地域に密着した整備・活用を図るため、鋭意努力して取り組んでおるところであります。その一つとしての南門復元整備事業も、今年度開館した東北歴史博物館と相俟って、当市を活性化するうえで大きな役割を果たしてくれるものと、期待しております。

本書は、多賀城跡の東側に隣接する西沢遺跡の発掘調査の成果を収録したものであります。調査の結果、平安時代の竪穴住居跡４軒が発見され、古代における多賀城跡東面一帯の様子がより具体的に把握できるようになりました。

最後に、発掘調査や報告書の作成にあたり、多大なご指導・ご協力いただきました方々に対し、衷心よりお礼を申し上げる次第です。

平成12年３月

多賀城市教育委員会
教育長　櫻　井　茂　男

例　　言

1. 本書は平成11年度の国庫補助事業として実施した西沢遺跡第８次調査の成果をまとめたものである。
2. 遺構の名称は第１次調査からの連番号である。
3. 平面図における座標値は国土座標「平面直角座標系Ｘ」を用いて設定した。
4. 挿図中の高さは標高値を示している。
5. 土色は『新版標準土色帖』（小山・竹原：1991）を使用した。
6. 本書の執筆・編集は当センター職員の協力を得て、相澤清利・車田　敦が行った。また、遺物の整理、図版の作成に際し、整理員の伊藤美恵子、内海由美子、浦風志恵子、遠藤友美、鹿野智子、熊谷純子、坂本英美、中村千恵子、村上和恵、渡邊奈緒の協力を得た。
7. 花粉分析は、古環境研究所に依頼した。
8. 本書の作成に際し、本田泰貴氏（東北陶磁文化館）、村田晃一氏（宮城県文化財保護課）の教示を得た。
9. 調査に関する諸記録および出土遺物はすべて多賀城市教育委員会が保管している。

目　　次

Ⅰ．遺跡の地理的・歴史的環境 …… 1
Ⅱ．調査に至る経緯と経過 …… 1
Ⅲ．調査成果 …… 5
　1　基本層序 …… 5
　2　発見した遺構と遺物 …… 5
　3　遺構外出土の遺物 …… 24
Ⅳ．考察とまとめ …… 24
Ⅴ．西沢遺跡第８次調査における花粉分析 …… 27

調査要項

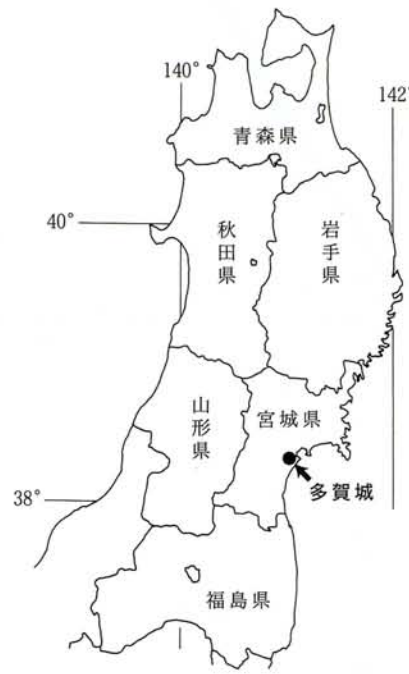
1. 遺　跡　名　西沢遺跡（宮城県遺跡登録番号18017）
2. 所　在　地　多賀城市市川字伊保石地内
3. 調査面積　約400㎡
4. 調査期間　平成11年７月８日～９月13日
5. 調査主体　多賀城市教育委員会　　教育長　櫻井　茂男
6. 調査担当　多賀城市埋蔵文化財調査センター　所　長　長田　　幹
7. 調　査　員　相澤清利、車田　敦
8. 調査協力者　佐藤丑之助、佐藤信夫
9. 調査参加者　阿部佳代子、浅野　忠、内海義雄、遠藤　実、大場勝喜、長田栄太郎、小野玉乃、小幡　武
菅原絹代、平山節子、福永孝二、藤田恵子、真野勝雄、渡辺正一、渡辺ひで子、渡辺ゆき子

Ⅰ．　遺跡の地理的・歴史的環境

(1)地理的環境

本遺跡は、多賀城市市川・浮島の両地区に所在している。地形的には松島丘陵から塩釜方面に向かって派生した低丘陵上の南西端部に位置し、東西450m、南北700mの範囲を占めている。標高は北側の丘陵尾根付近で約46m、南側の沖積地と接する付近で約６mであり、全体としては斜面の合間に大小の沢が入り込んだ景観を呈している。

今回の調査区は本遺跡の西端部にあたり、Ａ区は北側から南側に向かって傾斜する舌状丘陵の緩斜面上に位置している。後世の耕作によってかなり岩盤が削りとられており、地形の改変が著しい。一方Ｂ区は舌状丘陵と舌状丘陵の間に挟まれた谷にあたるところで、現在はだいぶ盛土がなされているが、古代においては深い谷が入っていた場所である。調査区の現況は畑であり、標高は最も高い北側で約32m、最も低い南側で約29mである。



第１図　多賀城市の位置

(2)歴史的環境

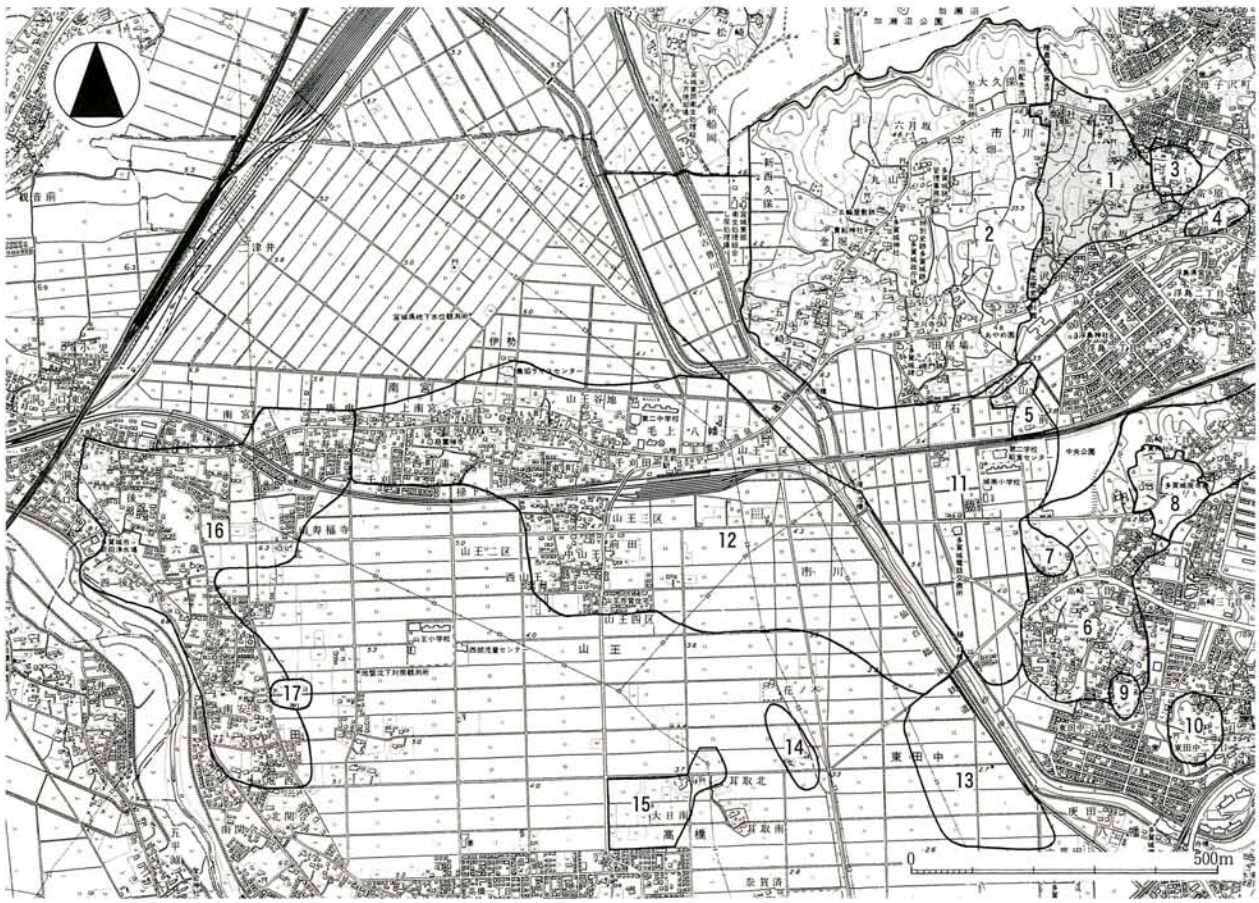
本遺跡の西側には、古代陸奥国府及び鎮守府が置かれた特別史跡多賀城跡が隣接している。今回の調査区から約100m西側には平安時代の外郭東辺築地があり、その内側には城内で最大の規模を有する実務官衙域が発見された大畑地区が位置している。一方、東側には奈良・平安時代を中心とする遺物散布地である法性院遺跡、高原遺跡が所在している。

本遺跡内では、これまで７度にわたる発掘調査を実施しており、古代から近世にかけての遺構・遺物を多数発見している。本調査区東側の近接地で行った第３次調査では、平安時代の鍛冶工房跡を含む14棟の竪穴住居をはじめ、中世の建物・井戸・土壙・溝などを発見している。また、東側の沢を隔てた第２次調査区では、平安時代の掘立柱建物19棟、竪穴住居４棟のほか、計画的に配置された中世の掘立柱建物36棟などを発見した。出土した遺物には、縄文時代、奈良・平安時代、中世、近世の各時代のものがある。中でも平安時代のものでは、灰釉陶器、緑釉陶器、硯、石帯、馬具、その他鍛冶関連の遺物などが出土しており、多賀城との関連性を伺わせるものである。

Ⅱ．　調査に至る経緯と経過

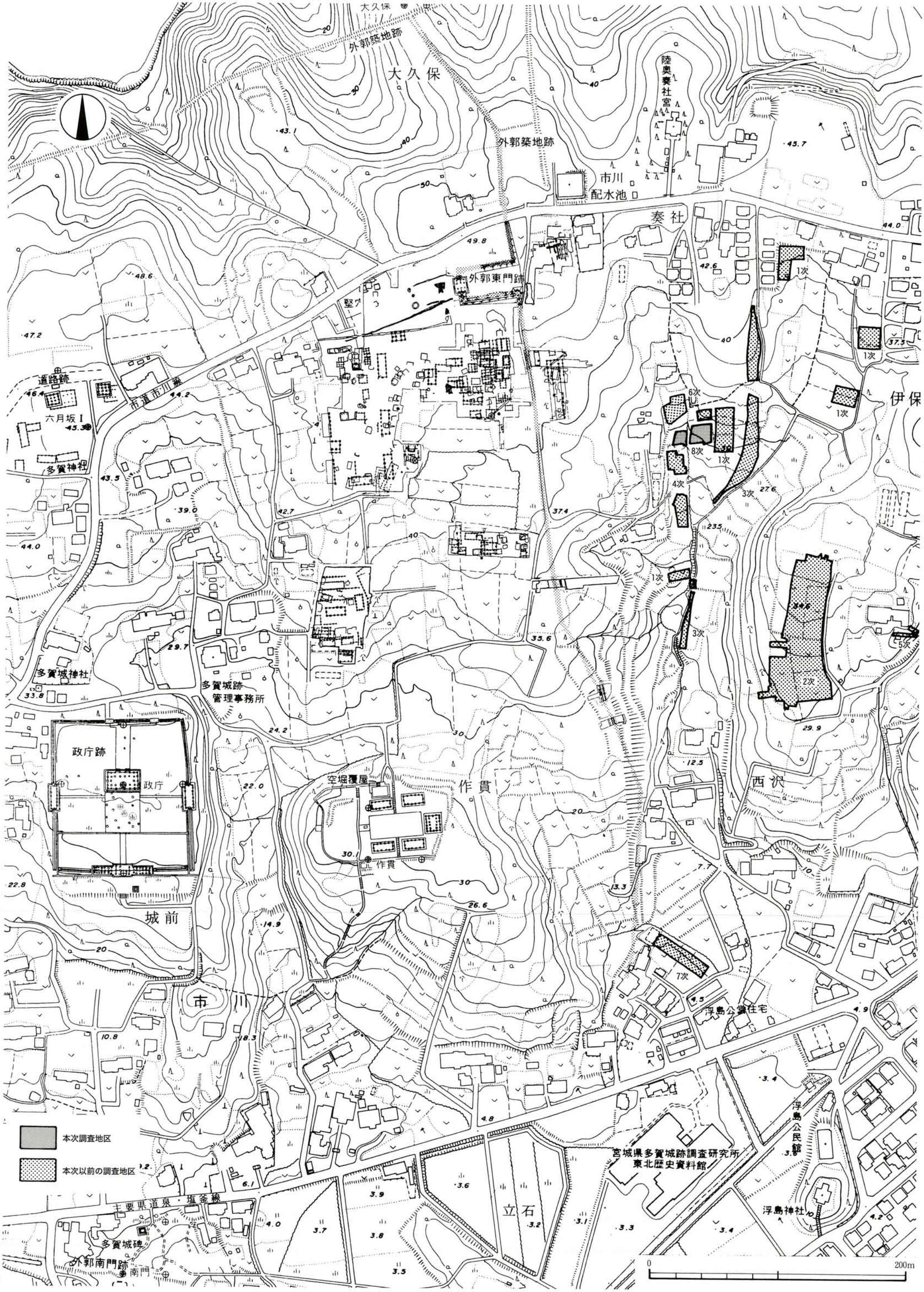
本調査は個人住宅建築に伴うものであり、昨年度より引き続き３ヵ年目となる。本調査地区周辺では多賀城跡と関連する遺構・遺物が数多く発見されていることや、対象区の面積が広大であり、現在畑として作付けを行っているという現状を考慮し、複数年計画の国庫補助事業として実施したものである。

調査にあたり、地権者の意向を受け昨年の調査区南側に二つの調査区を設置し、便宜上東側をＡ区、西



No.	遺跡名	所在地	立　地	種　別	時　代
1	西沢遺跡	市川、浮島	丘陵	集落跡	奈良・平安・中世・近世
2	特別史跡 多賀城跡	市川、浮島	丘陵、後背湿地	国府跡	奈良・平安・中世
3	法性院遺跡	浮島字高原	丘陵	散布地	奈良・平安
4	高原遺跡	浮島字高原	丘陵	散布地	奈良・平安
5	特別史跡 館前遺跡	浮島	分離丘陵	官衙、館跡	奈良・平安・中世
6	高崎遺跡	高崎、留ケ谷	丘陵	寺院跡、館跡、 集落跡	古墳・奈良・平安・中世
7	丸山囲古墳群	高崎二丁目	丘陵端	高塚古墳（円墳）	古墳（中期）
8	特別史跡 多賀城廃寺跡	高崎二丁目 一丁目	丘陵	寺院跡	奈良・平安
9	東田中窪前遺跡	東田中一丁目	丘陵麓	散布地、館跡	奈良・平安・中世
10	志引遺跡	東田中二丁目	丘陵	散布地、館跡	旧石器・奈良・平安・中世
11	市川橋遺跡	市川、浮島、高崎	自然堤防、後背湿地	集落跡、水田跡	弥生・古墳・奈良・平安
12	山王遺跡	山王、南宮	自然堤防、後背湿地	集落跡、水田跡	弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世
13	六貫田遺跡	八幡、東田中、高崎	後背湿地	散布地	奈良・平安
14	大日北遺跡	高橋字大日北	自然堤防、後背湿地	散布地	奈良・平安
15	大日南遺跡	高橋字大日南	自然堤防、後背湿地	集落跡	奈良・平安・中世・近世
16	新田遺跡	新田、山王、南宮	自然堤防	集落跡、水田跡	弥生・古墳・奈良・平安・中世
17	安楽寺遺跡	新田字上	自然堤防	散布地	古代・中世

第２図　多賀城市内遺跡分布図（西部）



第3図　大畑地区官衛の主要遺構と西沢遺跡調査実施地区

側をＢ区とした。また、Ａ区中央に実測図作成のための原点（Ｘ＝－188.010、Ｙ＝14.304）を設置し、これを通る南北及び東西方向の軸線をそれぞれの基準線とした。以下、調査経過について記載する。

７月８日、重機による表土除去開始。７月９日より作業員を導入し、調査機材の搬入及び調査区の環境整備を行い、７月12日から遺構検出作業を開始した。この結果、Ａ区では表土下から直ちに岩盤が現れその上面で遺構を検出した。Ｂ区では表土を含め６枚の土層を確認し、そのうちＶ層上面が中世の遺構検出面であることがわかった。７月23日、Ａ区の遺構検出状況の写真撮影を行った。７月26日、Ａ区の一部遺構掘り下げ開始及びＡ・Ｂ区の測量ピン打ち作業を行った。７月27日、Ａ区の1/20平面図作成開始。７月29日Ｂ区の1/20平面図作成開始。８月３日、Ａ区の竪穴住居跡（SI431・SI432）の掘り下げを開始し、その都度写真撮影、実測図作成などの作業をおこなった。以後８月５日、Ａ区の竪穴住居跡（SI430）、８月23日、竪穴住居跡（SI433）、８月25日、Ｂ区の溝跡（SD450）等についても掘り下げ作業から同様の手順で行った。また、Ａ区のピット群の検討を行ない、断ち割り後平面・断面図を作成した。９月10日、Ａ・Ｂ区完掘状況の全景写真撮影。９月13日、調査機材の搬出を行い、一切の作業を終了した。

Ⅲ.　調査成果

1.　基本層序

Ａ区の基本層序は基本的に、表土下が地山（岩盤）であるが、調査区の西側では谷に落ちる斜面となっており、この部分に堆積土（Ｂ区に対応するⅡ・Ⅲ・Ⅳ層）が認められている。一方、谷部のＢ区には、岩盤上に厚く堆積層が認められた。ここでは、Ｂ区の基本層序について説明する。

Ⅰ層：表土層（畑の耕作土）で、現代の溝の上に盛られたものである。暗褐色のシルトであり、層厚は20～30㎝を計る。

Ⅱ層：調査区全域に堆積するにぶい黄褐色のシルトで、層厚は５～15㎝を計る。近世の遺物を含む。

Ⅲ層：調査区全域に堆積する灰黄褐色の粘土であり、層厚は15㎝前後を計る。

Ⅳa層：調査区東半部に堆積する黒褐色の粘土質シルトで、層厚は10～20㎝を計る。中世の遺物を含む。

Ⅳb層：調査区の西半部に堆積する褐灰色の粘土で、層厚は５～20㎝を計る。中世の遺物を含む。

Ⅴ層：調査区の全域に堆積していたとみられるが、溝等の遺構によって掘り込まれている。灰褐色の粘土質シルトで、層厚は10～20㎝を計る。平安時代の遺物を含む。中世の遺構検出面。

Ⅵ層：調査区の全域に堆積する黒褐色のシルトで層厚は５～40㎝を計る。

Ⅶ層：黄白色の地山・岩盤層である。

2.　発見した遺構と遺物

(1)竪穴住居跡

SI430竪穴住居跡

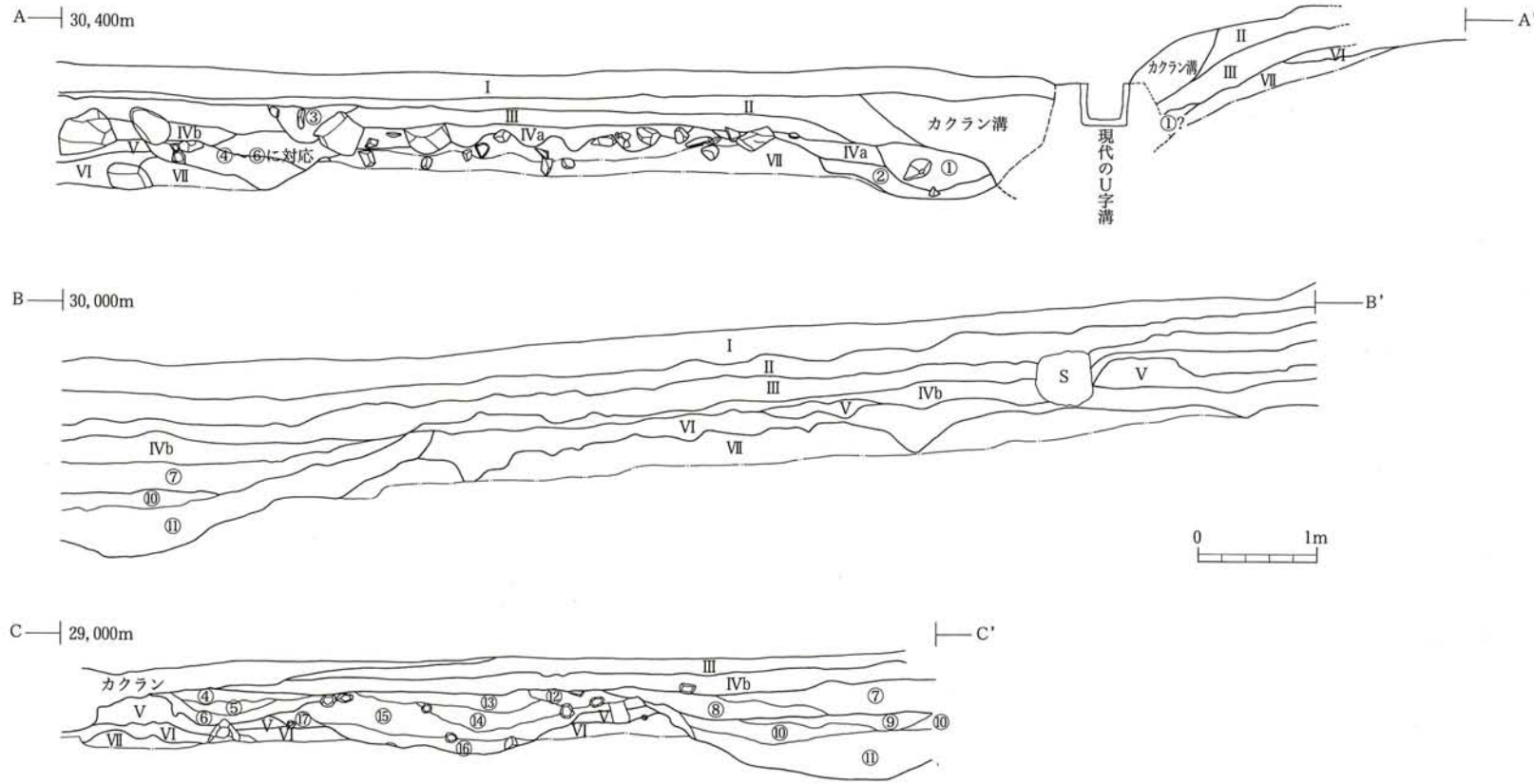
【位置】Ａ区、中央付近に位置する。

【検出面】地山面で確認された。

【遺存状況】北辺と東辺の一部が検出され、他は削平を受けていた。

【重複】SI433竪穴住居跡、SK438土壙、SD444溝跡と重複しており、それらよりも古い。

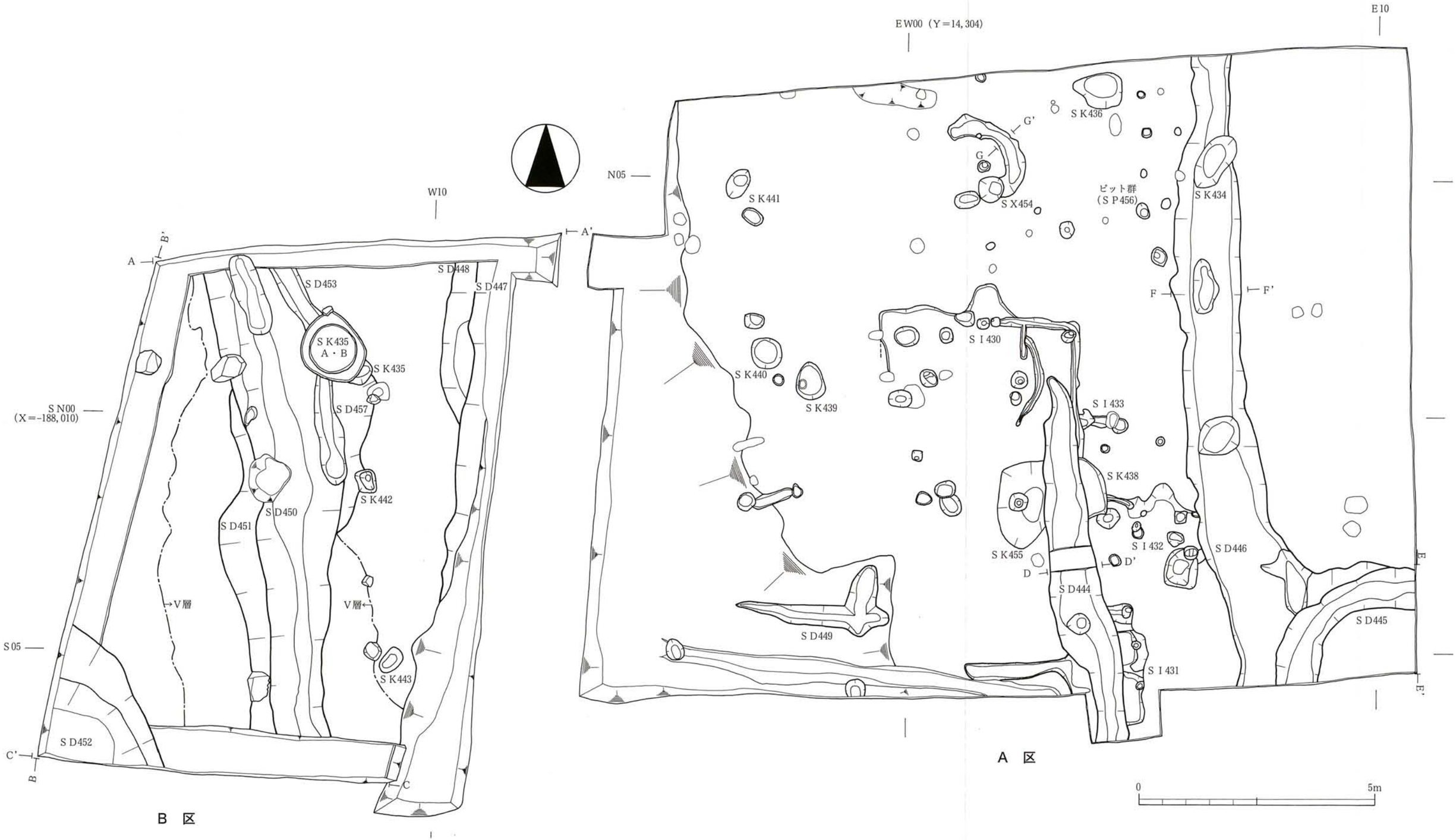
【平面形・方向】残存する部分と主柱穴と想定される柱の位置関係から、長方形をなすものと考えられる。



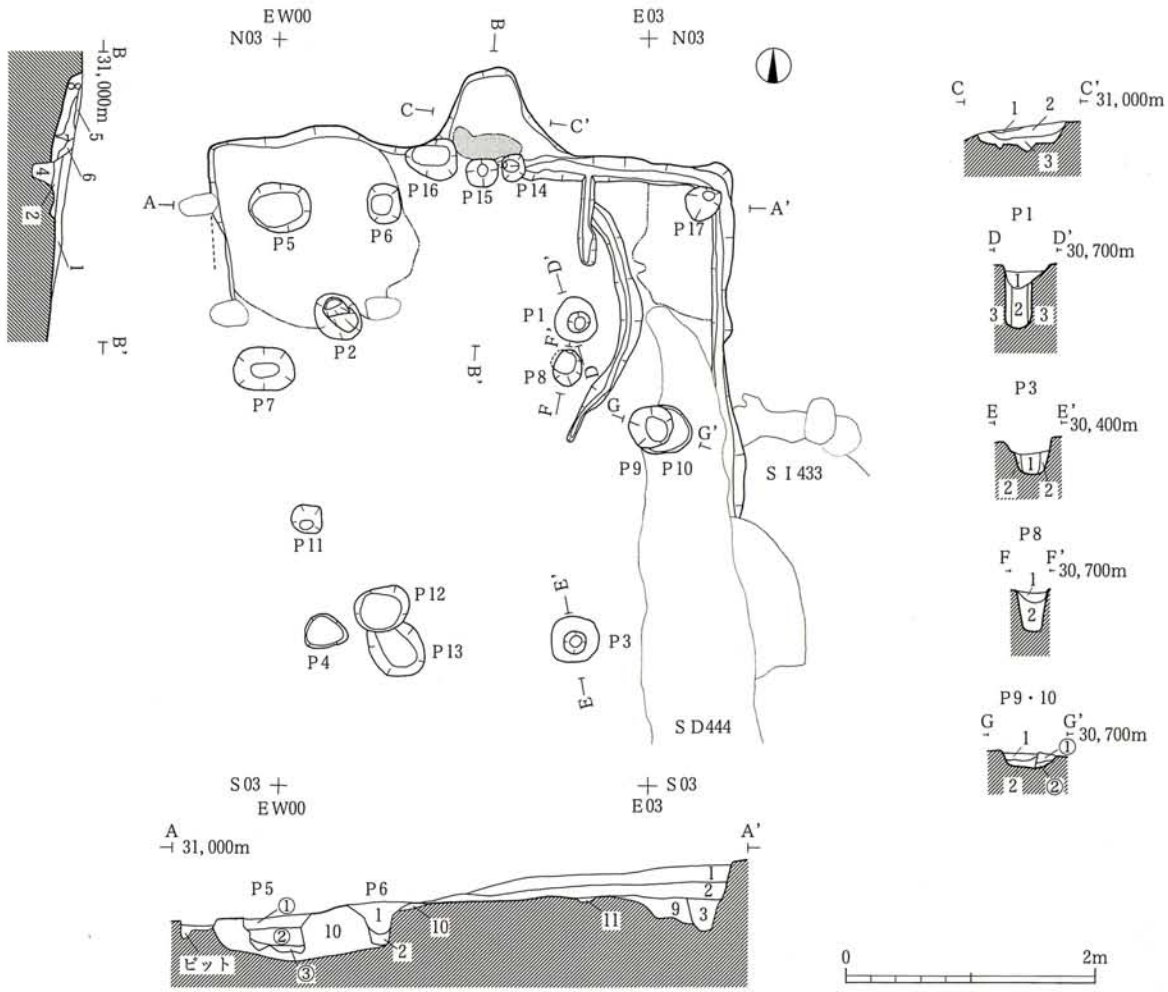
層No.	土色	土性	備考
I	暗褐色(10YR3/3)	シルト	粘性あり。地山粒、マンガン粒を含む。
II	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山粒、マンガン粒、炭化物を含む。
III	灰黄褐色(10YR4/2)	粘土	地山粒、マンガン粒、礫を含む。
IVa	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	酸化鉄、マンガン、地山粒、炭化物、礫(大)を含む。
IVb	褐灰色(10YR4/1)	粘土	地山粒を含む。マンガン粒、炭化物を多量に含む。
V	灰褐色(7.5YR4/2)	粘土質シルト	酸化鉄、地山粒、マンガン粒、礫を含む。
VI	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	粘性あり。マンガン粒、地山粒、礫を多量に含む。
VII	地山		(岩盤)

層No.	土色	土性	備考
SD447			
①	褐灰色(10YR5/1)	粘土	地山粒、礫(大)、酸化鉄、マンガン粒を含む。
SD448			
②	黄灰色(2.5Y5/1)	粘土	砂粒、礫、酸化鉄、マンガン粒を含む。
SD453			
③	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	礫、地山粒、酸化鉄、マンガン粒を含む。
SD450			
④	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	粘性あり。地山粒、マンガン粒、小礫を多く含む。
⑤	褐灰色(7.5YR4/1)	シルト	粘性あり、砂まじり。地山粒、マンガン粒、小礫を多く含む。
⑥	褐灰色(10YR4/1)	粘土	酸化鉄、地山粒、マンガン粒、礫を含む。
SD451			
⑫	灰黄褐色(10YR4/2)	粘土質シルト	地山粒、マンガン粒、炭化物、粗砂を含む。
⑬	灰黄褐色(10YR5/2)	粘土質シルト	地山粒を含む。マンガン粒、炭化物、礫を多量に含む。
⑭	褐灰色(10YR5/1)	粘土	地山粒を含む。マンガン粒、炭化物、礫を多量に含む。
⑮	褐灰色(10YR5/1)	粘土質シルト	酸化鉄、マンガン粒、礫を含む。
⑯	黄灰色(2.5Y5/1)	シルト	粘性あり。酸化鉄、地山粒、マンガン粒、多量の礫を含む。
⑰	黄灰色(2.5Y5/1)	粘土	マンガン粒、礫を多量に含む。
SD452			
⑦	灰黄褐色(10YR4/2)	粘土	地山粒、マンガン粒、礫を含む。
⑧	褐灰色(10YR4/1)	粘土	地山粒、マンガン粒、小礫を多量に含む。粗砂を含む。
⑨	褐灰色(10YR4/1)	粘土	地山粒、マンガン粒を含む。
⑩	黒褐色(10YR3/1)	粘土	地山粒、酸化鉄を少量含む。グライ化。
⑪	褐灰色(7.5YR4/1)	粘土	地山粒を含む。マンガン粒、炭化物、礫を多量に含む。

第4図　B区基本土層図


EW00 (Y=14,304)
E10
N05
W10
S N00
(X=-188,010)
S05
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
F
F'
G
G'
S K441
S K436
S X454
ピット群
(S P456)
S K434
S D453
S D448
S D447
S K435
A・B
S K435
S D457
S K440
S K439
S I 430
S I 433
S K438
S K442
S D450
S D451
S K455
S I 432
S D446
S D444
S D449
S D445
S I 431
S K443
S D452
V層
V層
A 区
B 区
0
5m

第5図　　検出遺構配置図



層No.	土色	土性	備考
1	にぶい黄橙色(10YR6/3)	シルト	地山粒を多量に含む。
2	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山粒を多量に含む。
3	灰褐色 (7.5YR4/2)	シルト	地山粒を含む。ピット17堆積土。
4	暗褐色 (7.5YR3/3)	粘土質シルト	ピット15堆積土。
5	褐灰色 (5YR5/1)	シルト	炭化物粒を含む。
6	灰褐色 (7.5YR4/2)	シルト	焼土粒を含む。
7	褐灰色 (5YR4/1)	シルト	焼土粒、カマド崩壊土ブロックを多量に含む。
8	にぶい黄橙色(10YR6/3)	シルト	焼土、カーボン粒、地山小ブロックを含む。
9	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	貼り床・掘り方埋土。
10	灰褐色 (7.5YR4/2)	シルト	地山ブロックを多量に含む。貼り床・掘り方埋土。
11	褐灰色 (10YR4/1)	粘土質シルト	
ピット1			
1	にぶい黄橙色(10YR6/3)	シルト	地山粒を多量に含む。切り取り穴。
2	褐灰色 (7.5YR4/1)	シルト	地山粒を含む。柱痕跡。
3	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	地山粒を少量含む。上層より粘性あり。掘り方埋土

層No.	土色	土性	備考
ピット3			
1	褐灰色 (7.5YR4/1)	シルト	地山粒、炭化物を少量含む。柱痕跡。
2	灰褐色 (7.5YR5/2)	シルト	地山粒を少量含む。掘り方埋土
ピット5 (貯蔵穴状ピット)			
①	褐灰色 (7.5YR5/1)	シルト	地山粒を多く含む。遺物多く含む。
②	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	地山小ブロックを多量に含む。
③	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山小ブロックを若干含む。
ピット6			
1	灰黄褐色 (10YR6/2)	シルト	地山粒を多量に含む。
2	灰黄褐色 (10YR5/2)	シルト	地山粒を少量含む。
ピット8			
1	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	地山粒を少量含む。
2	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	上層より粘性あり。
ピット9　ピット10			
1	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	地山粒を多量に含む。
2	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山粒を多量に含む。
①	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山ブロックを含む。
②	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土質シルト	地山粒を含む。

第6図　SI430竪穴住居跡

その方向は、東辺でみるとほぼ座標北に沿う。

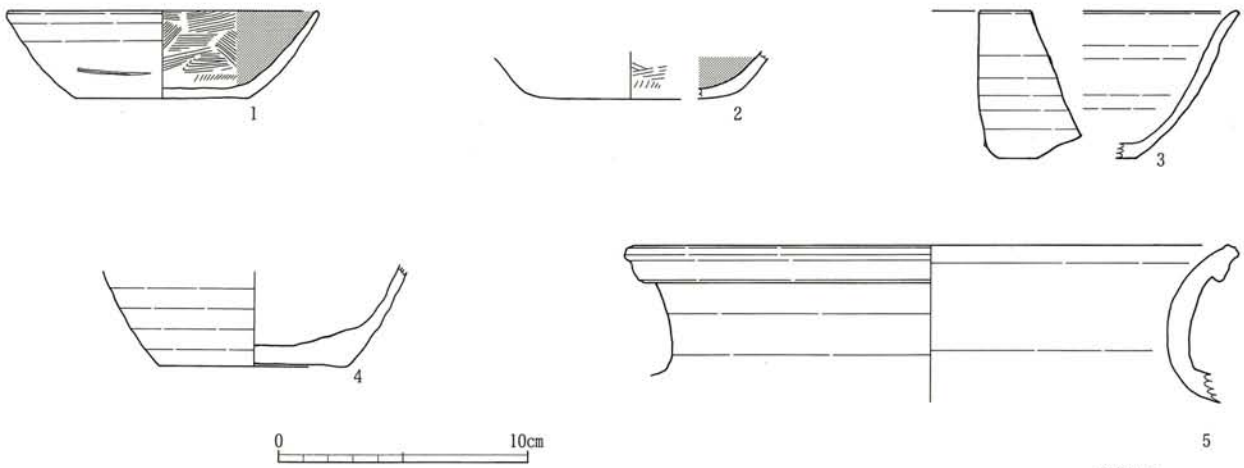
【規模】規模は東西方向で4.24mであり、南北方向は2.88m以上を計る。想定では5.25mとなる。

【堆積土】2層認められた。いずれも自然堆積層で、住居周縁部から中央部に向かい堆積している。

【壁の状況】地山を壁としており、残存壁高は約30cmを計る。

【床面の状況】住居の北東、北西隅付近は掘り方埋土を床面としているが、他は地山を床面としている。

【カマド】北辺のほぼ中央付近に位置し、燃焼部のみ検出された。燃焼部の奥壁は住居北壁を掘り込んで



単位：cm

番号	種別	器種	遺構・層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器	杯	SI430 P5	ロクロナデ、底部再調整	ヘラミガキ、黒色処理	1/4	(12.6)	(7.0)	3.5	6－1	1
2	土師器	杯	SI430 1－1	ロクロナデ	ヘラミガキ、黒色処理	体部～底部		(8.4)			107
3	須恵器	杯	SI430 P9	ロクロナデ 底部手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	1/24	(14.4)	(6.4)	5.8		11
4	土師器	甕	SI430 P2	ロクロナデ	ロクロナデ	体部～底部		(7.6)			10
5	須恵器	甕	SI430 1－1	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部	(24.4)				12

第７図　SI430竪穴住居跡出土遺物

つくられており、床面は硬く焼き締まり赤変している。カマド前・側面には、支脚・袖の補強材をすえていたピットが検出された。カマド内の堆積土（７～８層）には、焼土粒と浅黄色土ブロックが多量にみられ、天井あるいは側壁の崩壊土と考えられる。

【貯蔵穴状ピット】北西隅付近で、径約50cm・深さ30cmの楕円形を呈する土壙状のピットが検出された。位置関係から貯蔵穴の可能性が考えられる。

【柱穴】住居にともなうとみられるピットは17個検出された。このうちピット１～４は柱痕跡をもつものがあることや、住居内の位置関係により主柱穴と考えられる。

【周溝】北壁東半部から東壁沿いに検出された。幅10cm～20cm、深さ２cm～５cmを計り、断面形はU字形を呈する。

【出土遺物】堆積土、掘り方埋土、ピット内から若干の土器が出土している。このうち図示できたのは、土師器杯・甕、須恵器杯の３点である。この他に土師器片31点、須恵器片52点が出土しているが、土師器はすべてロクロ調整のものである。

SI431竪穴住居跡

【位置】Ａ区、中央の南端付近に位置する。

【検出面】地山面で確認された。

【遺存状況】東辺と北東隅、南東隅が検出され、残存状況は悪い。

【重複】SD444溝跡と重複しており、これより古い。

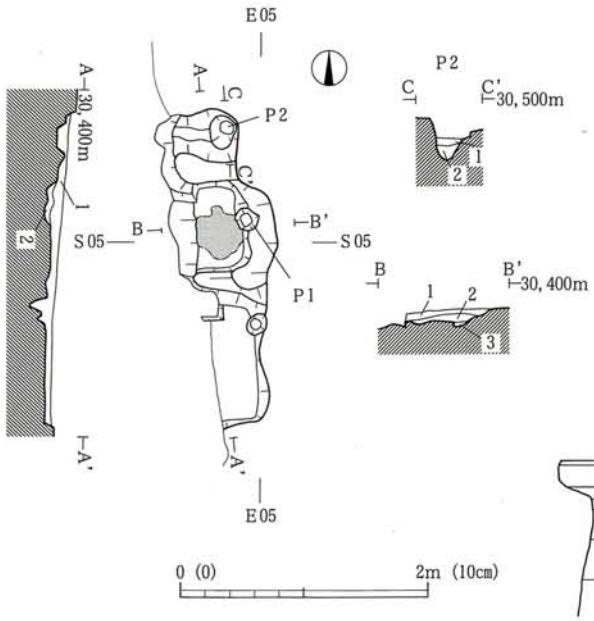
【平面形・方向】検出部分から平面形は、方形を基調とするものと推定される。方向は、東辺でみるとN－８°－Wである。

【規模】南北が2.53m、東西が0.55m以上である。

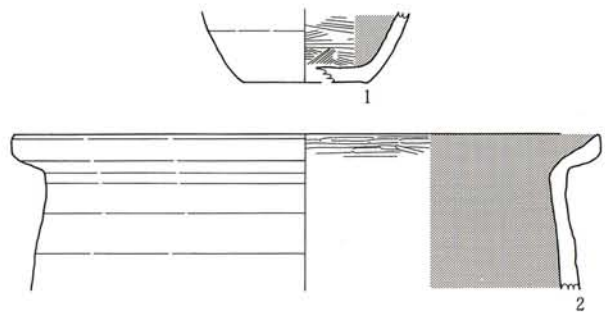
【堆積土】２層認められた。いずれも自然堆積層で焼土粒が混入する。

【壁の状況】地山を壁としており、残存壁高は約15cmを計る。

【床面の状況】地山面を床面としている。



層No.	土色	土性	備考
1	灰褐色(5YR4/2)	シルト	かたくしまりあり。焼土、地山ブロック、炭化物粒を含む。
2	灰赤色(2.5YR4/2)	シルト	かたくしまりあり。上層より粒が大きい。
3	黄褐色(10YR4/2)	シルト	ピット1堆積土
ピット2			
1	灰褐色(7.5YR5/2)	粘土質シルト	地山粒子を含む。
2	灰褐色(7.5YR5/2)	粘土質シルト	均質。



単位：cm

番号	種別	器種	遺構・層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器	小型杯	SI431 1－1	ロクロナデ	ヘラミガキ、黒色処理	体部～底部		(4.9)			8
2	土師器	甕	SI431 1－1	ロクロナデ	ヘラミガキ、黒色処理	口縁～体部	(23.4)				9

第8図　SI431竪穴住居跡と出土遺物

【カマド】東辺の中央よりやや北寄りに付設され、燃焼部のみ検出された。カマド底面は硬く焼き締り赤褐色化している。側壁は地山を削り出して構築している。奥壁中央付近には、深さ9㎝ほどの支脚をすえたと思われる小ピット（P1）を検出した。

【その他の施設】北東隅で長軸25㎝・深さ33㎝の不整楕円形を呈するピット（P2）を検出した。

【出土遺物】堆積土から若干の土器が出土している。このうち図示できたのは土師器小型杯・甕の2点である。この他に土師器片24点が出土しているが、いずれもロクロ調整のものである。

SI432竪穴住居跡

【位置】A区、南半の中央よりやや東寄り、SI431竪穴住居跡の北側に位置する。

【検出面】地山面で確認された。

【遺存状況】カマド周辺を含む北辺の一部が検出され、それ以外は削平されていた。

【重複】SK438土壙、SD444・SD446溝跡と重複しており、それらより古い。

【平面形・方向】検出部分から平面形は、方形を基調とするものと推定される。方向は、北辺でみるとE－9°－Sである。

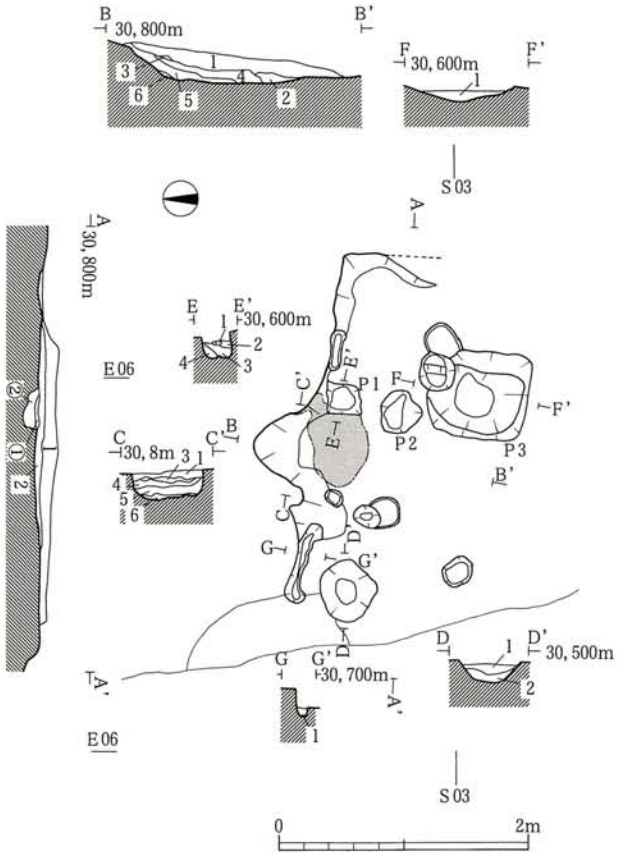
【規模】東西が2.85m以上である。

【堆積土】6層確認されいずれも自然堆積層である。

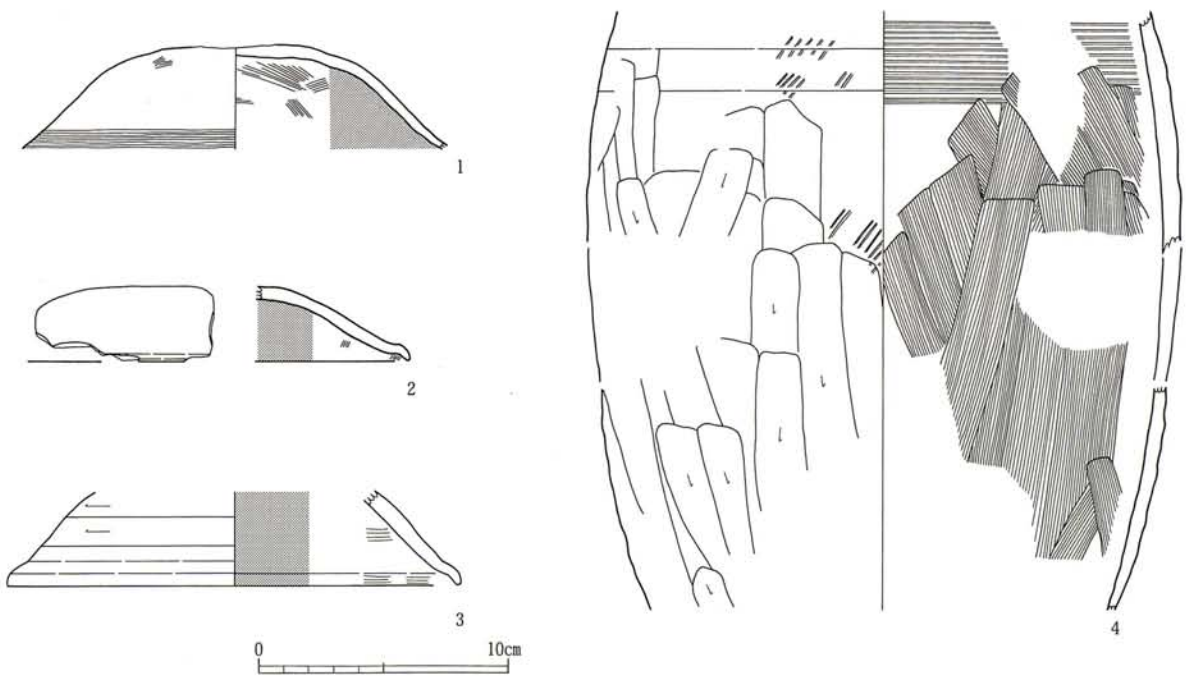
【壁の状況】地山を壁としており、残存壁高は約21㎝である。

【床面の状況】地山面を床面としており、カマド周辺はやや床面レベルが低くなっている。

【カマド】北辺のほぼ中央に位置するとみられ、燃焼部のみ検出された。燃焼部の奥壁は住居北壁を掘り込んで作られている。側壁は残存してないが補強材をすえたとみられるピットが2個検出された。カマド底面は非常に硬く焼けている。カマド内堆積土4層は浅黄色粘土小ブロックを多量に含むことから、天井あるいは側壁の崩壊土と考えられる。



層No.	土色	土性	備考
1	灰黄褐色(10YR6/2)	シルト	地山粒を多量に含む。
2	灰黄褐色(10YR6/2)	シルト	地山粒を多量に含む。 上層より若干粘性が強い。
3	淡赤色(2.5YR7/3)	シルト	地山粒を若干含む。
4	黄褐色(2.5YR7/3)	シルト	炭化物粒、浅黄色粘土小ブロック、 土器片を含む。
5	灰褐色(7.5YR5/2)	シルト	炭化物粒、焼土ブロックを多量に含む。
6	にぶい橙色(2.5YR6/3)	シルト	地山粒を含む。
貯蔵穴状ピット			
1	灰褐色(5YR5/2)	シルト	かたくしまりあり。地山小ブロックを含む。
2	灰褐色(5YR4/2)	シルト	かたくしまりあり。上層より少ない。
北壁カマド西側周溝			
1	灰褐色(7.5YR5/2)	シルト	地山粒を含む。
ピット1			
1	にぶい黄橙色(10YR7/3)	シルト	均質。
2	灰褐色(5YR5/2)	シルト	地山粒を含む。
3	灰褐色(5YR5/2)	シルト	焼土、地山粒を含む。
4	灰褐色(7.5YR5/2)	シルト	上層よりしまりなし。地山粒を多く含む。
ピット2			
①	浅黄色(2.5Y7/3)	シルト	均質。
②	褐灰色(7.5YR4/1)	シルト	地山粒、小ブロックを多量に含む。
ピット3			
1	淡赤橙色(2.5Y7/3)	シルト	地山ブロックと、茶褐色シルトが混じる。



単位：cm

番号	種別	器種	遺構・層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器	蓋	SI432 P1	非ロクロ	ヘラミガキ、黒色処理	口縁部				6－3	6
2	土師器	蓋	SI432 1-2	ロクロナデ	ヘラミガキ、黒色処理	口縁部					7
3	土師器	蓋	SI432 1-3	ロクロナデ	ヘラミガキ、黒色処理	1/6	(18.2)				5
4	土師器	甕	SI432 1-4	平行叩きのちロクロナデ 体部手持ちヘラケズリ	回転ハケメ ヘラナデ						108

第9図　SI432竪穴住居跡と出土遺物

【貯蔵穴状ピット】北西隅付近に径約50㎝、深さ約35㎝の不整円形の土壙状ピットが検出された。位置関係から貯蔵穴の可能性が考えられる。

【柱穴】住居床面から７個のピットが検出されたが、柱穴と考えられるものはない。

【周溝】カマド両側の壁際直下において部分的に確認された。幅９㎝、深さ５㎝を計り、断面はＵ字形を呈する。

【出土遺物】堆積土、カマド内、ピットから若干の土器が出土している。このうち図示できたものは土師器蓋・甕の４点である。この他に土師器片23点（内ロクロ調整12点・非ロクロ調整３点・不明８点）須恵器片３点、灰釉陶器片１点、平瓦片１点がある。

SI433竪穴住居跡

【位置】Ａ区、ほぼ中央SI430竪穴住居跡の東側に接する。

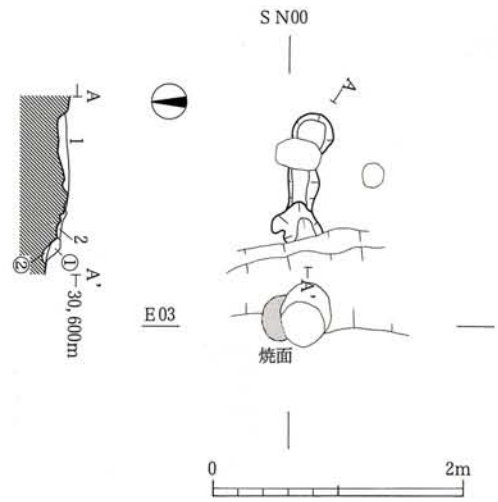
【検出面】地山面で確認された。

【遺存状況】残存状況は非常に悪く、カマドの一部のみが検出された。

【重複】SI430竪穴住居跡、SD444溝跡と重複しており、それらよりも古い。

【平面形・方向】残存している煙道の方向からおよそ座標東より若干南に振れる程度とみられる。

【堆積土】２層認められた。１層が炭化物・焼土粒を多量に含む煙道部の堆積土で、２層が燃焼部奥壁堆積土である。



層No.	土色	土性	備考
1	褐灰色（5YR4/1）	シルト	炭化物粒、焼土粒を多量に含む。
2	暗灰黄色（2.5Y5/2）	シルト	地山ブロックを多量に含む。
①	SI430堆積土		
②	SI430周溝堆積土		

第10図　SI433竪穴住居跡

【カマド】燃焼部の奥壁と、煙道部が残存していた。煙道は長さ70㎝・幅20㎝を計り、先端はピット状になっている。また、カマドに伴うとみられる焼面が、SI430竪穴住居跡床面上より検出された。

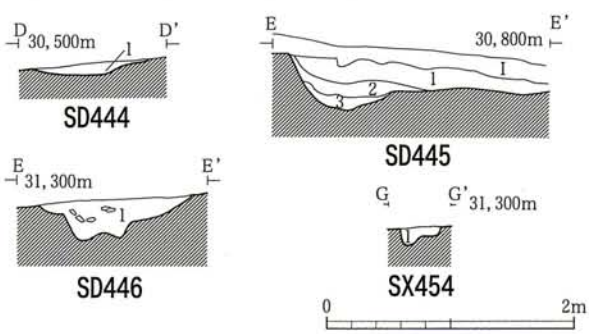
【出土遺物】遺物は出土していない。

(2)溝跡

SD444溝跡

【位置】Ａ区、中央の南半部に位置する。

【検出面・重複】地山面で確認された。SI430・431・432・433竪穴住居跡、SK438・455土壙と重複してお



層No.	土色	土性	備考
SD444			
1	にぶい黄褐色（10YR5/3）	シルト	地山粒、マンガン粒を含む。
SD445			
1	灰黄色（2.5YR6/2）	シルト	地山粒を含む。しまりあり。
2	暗灰黄色（2.5YR5/2）	シルト	地山粒を含む。しまりあり。
3	暗灰黄色（2.5YR4/2）	シルト	地山粒を含む。上層よりしまり、粘性、ややあり。
SD446			
1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	地山粒、地山ブロック、礫（石）、マンガン粒を含む。
SX454			
1	にぶい黄橙色（10YR6/3）	シルト	地山ブロックを多量に含む。

第11図　SD444～446溝跡・SX454

り、それらより新しい。

【方向・規模】南北方向にほぼ直線的に走る。方向はN－10°－Wである。確認された長さは約7.8mで、最大幅1.2m、深さ10cmを計る。

【堆積土】1層認められ、地山粒を含むしまりのない土層である。

【壁・底面】底面は平坦で壁はゆるやかに立ち上がる。底面レベルは北から南へ向かってゆるやかに傾斜する。

【出土遺物】図示できた遺物は堆積土出土の近世の磁器碗1点である。これらの他に近世の陶器破片2点、土師器片17点、須恵器破片20点、古代の瓦片2点、剥片1点が出土している。

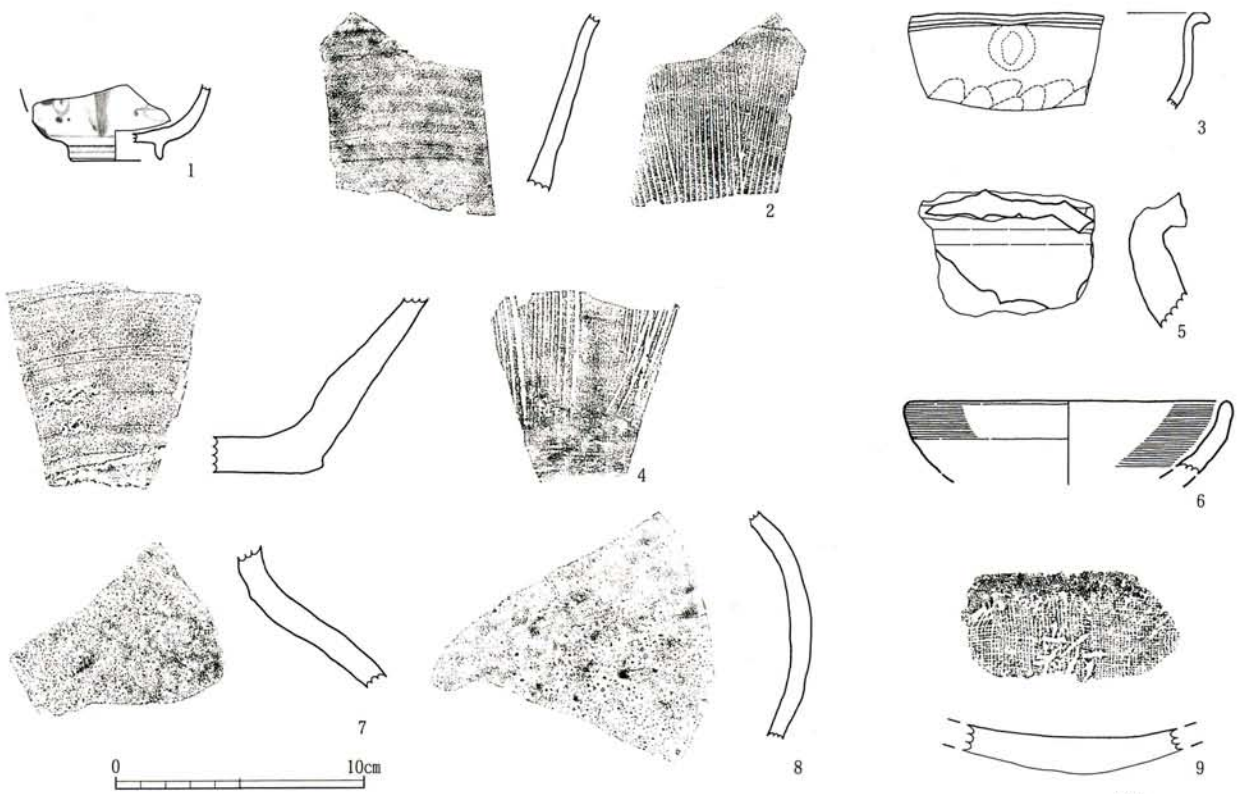
SD445溝跡

【位置】A区、南東隅に位置する。

【検出面・重複】地山面で確認された。SD446溝跡と重複しており、これより新しい。

【方向・規模】ほぼ直角に屈曲する部分が検出され、東端・南端はいずれも調査区外へと延びる。確認できる長さは約5.4mで、最大幅90cm、深さ25～45cmを計る。

【堆積土】3層認められいずれも自然堆積層である。1層は溝の南側にオーバーフローして堆積する。



単位：cm

番号	種別	器種	遺構・層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考	写真図版	登録番号
1	磁器	碗	SD444 堆積土			破片		(3.6)		産地 東海、年代 19C中葉	6－14	81
2	陶器	擂鉢	SD446 堆積土	ロクロナデ	ロクロナデ、筋目	破片				年代 18C	6－16	80
3	磁器	鉢	SD447 堆積土	指頭状押圧文		破片	(23.0)			産地 瀬戸？、年代 19C中葉	6－15	82
4	陶器	擂鉢	SD447 堆積土	ロクロナデ	ロクロナデ、筋目	破片				年代 18C	6－17	78
5	無釉陶器	甕	SD448 堆積土	ロクロナデ	ロクロナデ	破片				産地 東海、年代 中世	6－10	101
6	かわらけ	皿	SD452 堆積土	ヨコナデ	ヨコナデ	破片	(13.2)			手づくね		110
7	無釉陶器	甕	SD452 堆積土	自然釉	ヘラナデ	破片				産地 東海、年代 中世	6－12	63
8	無釉陶器	甕	SD452 堆積土	自然釉	ヘラナデ	破片				産地 東海、年代 中世		64

番号	種別	遺構・層位	特徴	備考	登録番号
9	軒平瓦	SD453 堆積土	【凹面】布目 【凸面】剥離	凹面にヘラがき「新」	46

第12図　SD444～448・452・453溝跡出土遺物

【壁・底面】断面の形状はゆるいU字状で、底面は凹凸が著しい。

【出土遺物】図示できる遺物はないが、堆積土より土師器甕の破片３点が出土している。

SD446溝跡

【位置】Ａ区、東半に位置する。

【検出面・重複】地山面で確認された。SI432竪穴住居跡、SK434土壙、SD445溝跡と重複しており、SI432竪穴住居跡より新しく、SK434土壙、SD445溝跡より古い。

【方向・規模】南北方向に走り、調査区南東隅で東へと分岐する。方向はほぼ座標北に沿う。確認された長さは13.3ｍで、最大幅1.6ｍ、深さ10㎝を計る。溝内には不整形の土壙状落ち込みが３ヶ所確認された。

【堆積土】１層のみで、地山粒・ブロックを多量に含んでおりしまりがない。

【壁・底面】底面は凹凸がみられるが、壁は内湾ぎみにゆるやかに立ち上がる。底面レベルは地形の傾斜に沿う。

【出土遺物】堆積土より近世の陶器擂鉢２点が出土しており、このうち図示できたものは１点である。これらの他に土師器片16点、須恵器片５点、赤焼き土器片１点、灰釉陶器片２点が出土している。

SD447溝跡

【位置】Ｂ区、東壁際に位置する。

【検出面・重複】Ⅳa層上面で確認された。SD448溝跡と重複しており、これより新しい。

【方向・規模】南北方向にほぼ直線的に走る。方向はN－６°－Eである。確認された長さは約9.8ｍで、幅1.2ｍ以上、深さ約40㎝を計る。

【堆積土】１層のみ確認された。

【壁・底面】底面は丸底ぎみで、壁はゆるやかに内弯して立ち上がる。

【出土遺物】図示できた遺物は、堆積土出土の近世の磁器鉢、陶器擂鉢の２点である。これらの他に土師器片２点、須恵器片８点、古代の瓦片６点が出土している。

SD448溝跡

【位置】Ｂ区、東壁付近に位置する。

【検出面・重複】地山面で確認された。Ⅳa層におおわれSD447溝跡と重複し、これより古い。

【方向・規模】南北方向に走り、検出した南端付近ではやや東に曲がる。

【堆積土】１層のみ確認された。

【壁・底面】底面はほぼ平坦で、壁は外傾しながら立ち上がる。

【出土遺物】図示できた遺物は、堆積土出土の中世の無釉陶器甕１点である。これらの他に土師器片３点、須恵器片22点、赤焼き土器片２点、古代の瓦片５点が出土している。

SD449溝跡

【位置】Ａ区、南西隅付近に位置する。

【検出面・重複】Ⅳ層上面で確認された。

【方向・規模】東西方向を基幹とし、東端近くでは北側と南側に張り出しを持つ。確認された長さは4.2ｍで、幅0.6ｍ、深さ25㎝を計る。張り出し部分は、長さ２ｍ、幅0.8ｍである。

【堆積土】２層認められ、土相はⅢ層土に類似する。

【壁・底面】底面は丸底ぎみで、開きながら直線的に立ち上がる。

【出土遺物】図示できる遺物はないが、堆積土より土師器片５点が出土している。

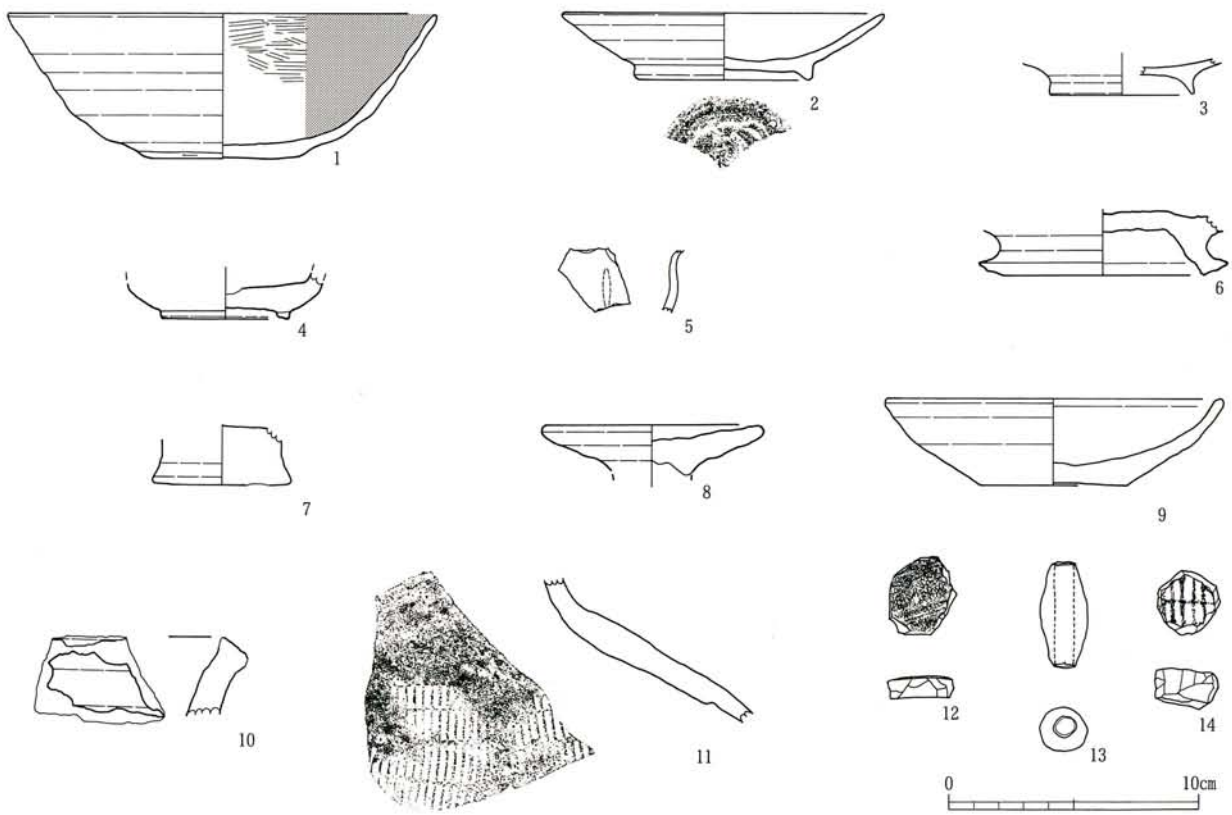
SD450溝跡

【位置】Ｂ区、ほぼ中央付近に位置する。

【検出面・重複】IVb層に覆れ、Ｖ層上面で確認された。SD451・SD453溝跡、SK435土壙と重複しており、SD453溝跡、SK435土壙より古く、SD451溝跡より新しい。

【方向・規模】南北方向へやや西に蛇行しながら走る。確認された長さは約11ｍで、最大幅２ｍ、深さ30～50㎝を計る。調査区の北壁近くには、長軸1.74ｍ、短軸60㎝、深さ20㎝の隅丸長方形を呈する土壙が付属している。

【堆積土】調査区南壁断面では３層認められ、下層ほど粘性が強くなる自然堆積である。

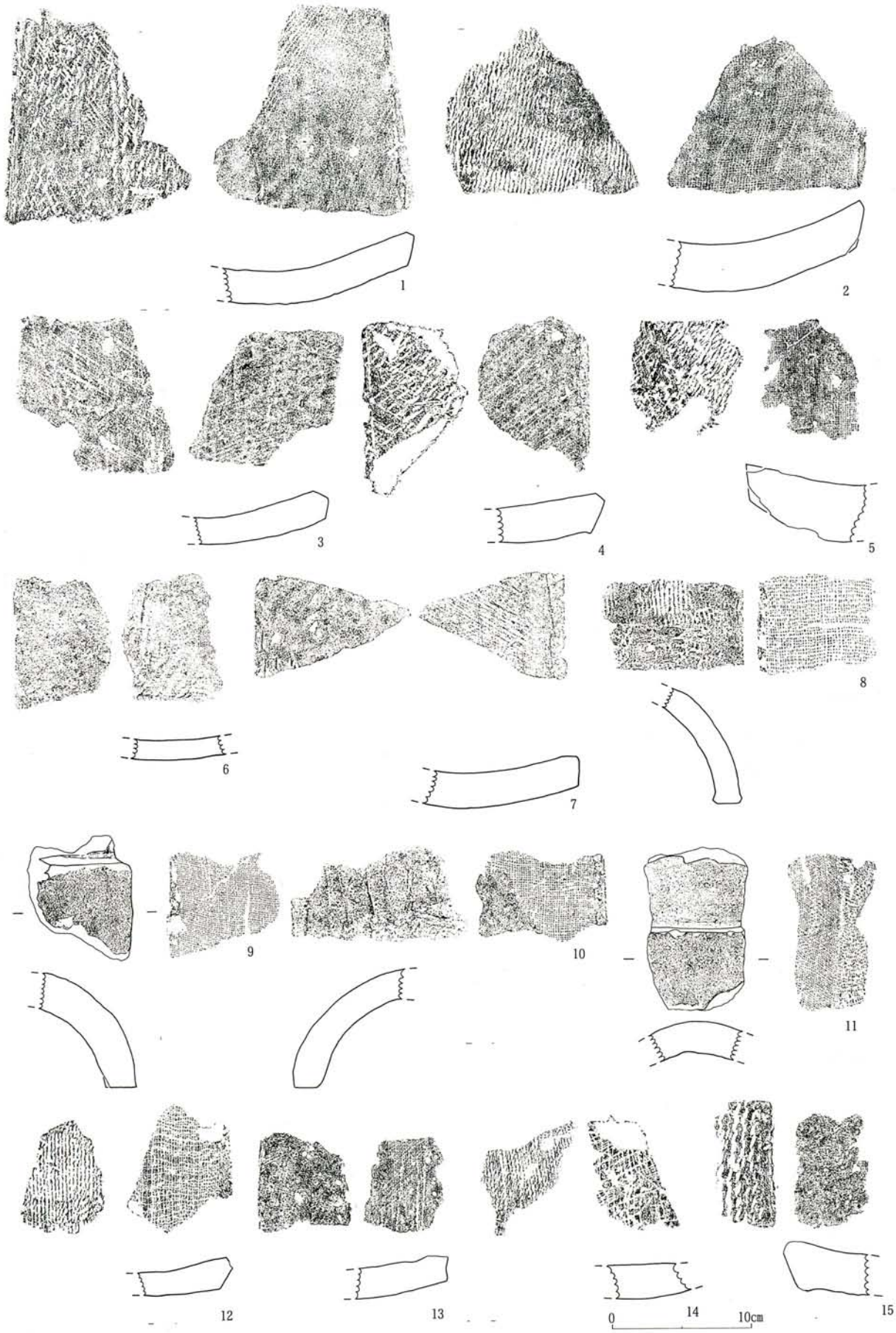


単位：cm

番号	種別	器種	遺構・層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考	写真図版	登録番号
1	土師器	杯	SD450 堆積土	ロクロナデ、底部回転糸切り→手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	口縁～底部	(16.6)	6.2	5.9			3
2	赤焼き土器	杯	SD450 堆積土	ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	口縁～底部	(13.0)	(6.8)	(2.7)		6－4	16
3	赤焼き土器	高台付杯	SD450 堆積土	ロクロナデ	ロクロナデ	体部～底部		(5.8)				15
4	灰釉陶器	耳皿	SD450 堆積土	底部回転ケズリ		体部～高台		(5.3)				22
5	白磁		SD450 堆積土			破片				産地 中国、年代 中世		31
6	須恵器	長頸瓶	SD450 堆積土	ロクロナデ	ロクロナデ	底部		10.0				76
7	かわらけ		SD450 堆積土	ロクロナデ、底部回転糸切り		高台		(5.6)		柱状高台	6－5	17
8	かわらけ		SD450 堆積土	ロクロナデ	ロクロナデ	1/3	(7.7)	(1.9)	2.0	柱状高台？		18
9	赤焼き土器	杯	SD450 堆積土	ロクロナデ、底部回転糸切り		口縁～底部	(13.5)	5.9	3.5		6－6	13
10	無釉陶器	甕	SD450 堆積土	ロクロナデ	ロクロナデ	破片				産地 在地、年代 中世	6－11	60
11	無釉陶器	甕	SD450 堆積土	格子の押印	ヘラナデ	破片				産地 東海、年代 中世	6－13	54

番号	種別		遺構・層位	特　　徴	長さ	幅	厚さ	重量(g)	孔径	備考	写真図版	登録番号
12	円盤状土製品		SD450 堆積土	須恵器甕	3.1	2.6	0.9	10			6－9	93
13	土錘		SD450 堆積土	外面オサエ	4.2	1.9	1.8	10	0.65		6－7	91
14	円盤状土製品		SK435B 堆積土	須恵器甕、平行叩き	2.5	2.5	1.5	10			6－8	92

第13図　SD450溝跡、SK435B土壙出土遺物



第14図　SD450・452溝跡出土遺物（瓦）

番号	種別	遺構	特　徴	備　考	登録番号
1	平瓦	SD450	【凹面】布目→ナデ【凸面】タタキ→凹型台圧痕	ⅡB－b類	36
2	平瓦	SD450	【凹面】布目→ナデ【凸面】タタキ→凹型台圧痕	ⅡB－b類	32
3	平瓦	SD452	【凹面】布目、(糸切り痕) →ナデ【凸面】ナデ	ⅠA類	43
4	平瓦	SD450	【凹面】布目→ナデ【凸面】タタキ→凹型台圧痕	ⅡB－b類	38
5	平瓦	SD450	【凹面】布目、【凸面】タタキ→タタキのつぶれ	ⅡB－a類	33
6	平瓦	SD450	【凹面】布目、→ナデ【凸面】ナデ	ⅠA類	45
7	平瓦	SD450	【凹面】布目、(糸切り痕) →ナデ【凸面】ナデ	ⅠA類	44
8	丸瓦	SD450	【凹面】布目、(粘土紐痕)【凸面】タタキ→ロクロナデ	Ⅱ類	48
9	丸瓦	SD450	【凹面】布目【凸面】ロクロナデ	ⅡB類	51
10	丸瓦	SD450	【凹面】布目、側端部ヘラケズリ、一部ナデ【凸面】ロクロナデ→縦方向ケズリ	下伊場野＊第３類の玉縁部分（形態B2、技法Ⅱ）	47
11	丸瓦	SD450	【凹面】布目【凸面】ロクロナデ	ⅡB類	50
12	平瓦	SD452	【凹面】布目【凸面】縄タタキ→凹型台圧痕	ⅡB－b類	40
13	平瓦	SD452	【凹面】糸切り痕、模骨痕、布目→ナデ【凸面】ナデ	ⅠA類	42
14	平瓦	SD450	【凹面】布目【凸面】タタキ	ⅡC類	35
15	平瓦	SD450	【凹面】布目→ナデ【凸面】タタキ→凹型台圧痕	ⅡB－b類	37

＊瓦の分類の内、№10は下伊場野窯跡群の分類を、他は多賀城跡の分類を使用した。

第14図　SD450・452溝跡出土遺物（瓦）

【壁･底面】底面は北半では船底状であるが、南半では皿状をなす。壁は底面からゆるやかに立ち上がり、上方で開いている。

【出土遺物】堆積土から多量の遺物が出土した。その中で図示できたのは、かわらけ２点、中世の無釉陶器甕２点・白磁片１点、土師器杯１点、須恵器瓶１点、赤焼き土器杯２点・高台付杯１点、灰釉陶器耳皿１点、古代の瓦12点、土錘１点、円盤状土製品１点である。これらの他に、土師器片855点、須恵器片773点、赤焼き土器片82点、古代の瓦片161点、緑釉陶器片１点、灰釉陶器片３点、青磁片１点、無釉陶器片８点、羽口片２点が出土した。

SD451溝跡

【位置】Ｂ区、ほぼ中央SD450溝跡の西側に接する。

【検出面・重複】Ｖ層上面で確認された。SD450溝跡と重複しており、これより古い。

【方向･規模】ほとんどがSD450溝跡に壊されているため西辺の一部のみが検出された。このため方向については不明瞭であるが、座標北に対してはやや西に偏する程度であろう。確認された長さは約８ｍで、幅は調査区南壁断面での観察では2.8ｍ以上、深さは50cmを計る。

【堆積土】調査区南壁断面の観察では６層に分層され、いずれも自然堆積である。

【壁・底面】底面は皿状をなしており、壁はゆるやかに立ち上がる。

【出土遺物】図示できる遺物はないが、堆積土より土師器片８点、須恵器片18点、赤焼き土器片６点が出土している。

SD452溝跡

【位置】Ｂ区、南西隅に位置する。

【検出面・重複】Ⅳb層に覆われ、Ｖ層上面で確認された。SD451溝跡と重複しており、これより新しい。

【方向・規模】部分的な検出のため定かでないが、南北方向の溝が西へと屈曲するところではないかと考えられる。幅は３ｍ以上、深さ80cmを計る。

【堆積土】５層に分層されるが、いずれも粘土化した土である。

【壁・底面】底面は丸底風で、壁はゆるやかに内弯しながら立ち上がる。

【出土遺物】図示できた遺物は、かわらけ片（手づくね）１点、中世の無釉陶器２点、古代の瓦片３点である。これらの他に無釉陶器片２点、土師器片371点、須恵器片402点、赤焼き土器片42点、灰釉陶器片１点、内面に摩耗痕のある須恵器甕片１点、古代の瓦片94点、砥石１点が出土している。

SD453溝跡

【位置】Ｂ区、北半の中央付近に位置する。

【検出面・重複】Ⅲ層上面で確認された。SK435土壙と重複しており、これより古い。

【方向・規模】SK435土壙より南側では約10°西に偏しているが、それより北側では屈曲し約35°西にさらに偏する。確認された長さは約５ｍで、幅70㎝、深さ30㎝を計る。

【堆積土】１層のみ確認された。

【壁・底面】断面はＵ字形をなしており、壁は底面からゆるやかに立ち上がり外傾する。

【出土遺物】図示できる遺物はないが、堆積土より中世陶器片１点、土師器片27点、須恵器片55点、灰釉陶器片１点、古代の瓦片12点が出土している。

SD457溝跡

Ｂ区、ほぼ中央付近に位置する。地山面で確認された。SK435・SK437土壙、SD450・SD453溝跡と重複しており、それらより古い。およそ南北方向に走るとみられるが、部分的にしか検出されていないためその全容は不明である。

⑶土壙

SK434土壙

【位置】Ａ区、北東隅付近に位置する。

【検出面・重複】地山面で確認された。SD446溝跡と重複しており、これより新しい。

【平面形・方向・規模】平面形は不整楕円形をなし、その長軸方向はN－33°－Eである。規模は長軸1.3ｍ、短軸60㎝、深さは13㎝である。

【堆積土】１層のみで、地山の礫を多量に含んでいる。

【壁・底面】底面中央付近がやや盛り上がり、壁は内弯しながらゆるやかに立ち上がる。

【出土遺物】図示できる遺物はないが、堆積土より須恵器甕破片１点が出土している。

SK435A・B土壙

【位置】Ｂ区、中央よりやや北寄りに位置する。

【検出面・重複】Ⅲ層上面で確認された。SD453溝跡と重複しており、これより新しい。

【平面形・規模】Ａの平面形はほぼ円形をなし径1.25ｍを計る。その５～15㎝内側には同様の円形プランで土層の違いが認められ、その底面の一部には木片が巡っていた（Ｂ）。深さはＡが44㎝、Ｂが40㎝を計る。Ｂを掘り方埋土とみれば、井戸の可能性も考えられる。

【堆積土】７層に分層され、１～４層は下層ほど粘性が強くなる自然堆積土である。５～７層は、自然堆積土か人為堆積土か区別できなかった。

【壁・底面】Ａの底面はほぼ平坦であり、壁は直線的に外傾する。Ｂの壁は西側でオーバーハングするが他では直線的に立ち上がる。

【出土遺物】図示できる遺物はないが、Ａの堆積土より近世陶器碗片１点・甕片１点、土師器片20点、Ｂより土師器片５点、須恵器片７点、古代の瓦片２点、円盤状土製品１点が出土している。

SK436土壙

【位置】Ａ区、ほぼ中央北壁際に位置する。

【検出面・重複】地山面で確認された。重複はない。

【平面形・方向・規模】平面形は不整隅丸長方形で、その長軸は東西方向に近く、E－２°－Sである。規模は長軸1.08m、短軸75cm、深さ20cmを計る。

【堆積土】１層のみ確認された。

【壁・底面】北壁は急に立ち上がるが、他の壁は比較的ゆるやかに立ち上がる。底面は平坦であるが、中央付近でわずかに段がみられる。

【出土遺物】図示できる遺物はないが、堆積土より土師器片４点、須恵器片１点が出土した。

SK437土壙

【位置】Ｂ区、ほぼ中央のやや北寄りに位置する。

【検出面・重複】地山面で確認された。SK435土壙、SD457溝跡と重複しており、前者より古く、後者より新しい。

【平面形・方向・規模】平面形は不整な楕円形をなし、その長軸方向はN－57°－Eである。規模は長軸59cm、短軸43cm、深さ24cmを計る。

【堆積土】２層確認され、いずれも自然堆積土で、粘性が強い特徴をもつ。

【壁・底面】底面は丸底ぎみで、壁は内弯しながら立ち上がる。

【出土遺物】図示できる遺物はないが、堆積土より土師器片１点、須恵器片２点が出土した。

SK438土壙

【位置】Ａ区、ほぼ中央よりやや南寄りに位置する。

【検出面・重複】地山面で確認された。SI432・433竪穴住居跡、SD444溝跡と重複しており、SD444溝跡より古く、その他より新しい。

【平面形・方向・規模】平面形は不整方形を呈していたと思われ、方向は残存する東辺でみるとN－16°－Wである。規模は長軸1.3m、短軸75cm以上、深さ22cmを計る。

【堆積土】３層に分けられ、いずれも自然堆積土である。

【壁・底面】底面は起伏があり、壁は急角度で立ち上がる。

【出土遺物】図示できる遺物はないが、堆積土より土師器片（ロクロ調整）２点、須恵器片１点が出土した。

SK439土壙

【位置】Ａ区、ほぼ中央よりやや西寄りに位置する。

【検出面・重複】地山面で確認された。重複はない。

【平面形・方向・規模】平面形は楕円形をなし、その長軸方向はN－２°－Wである。規模は長軸81cm、短軸59cm、深さ14cmを計る。

【堆積土】１層のみ確認された。

【壁・底面】断面形は皿状を呈し、一部底面中央付近にくぼみがある。

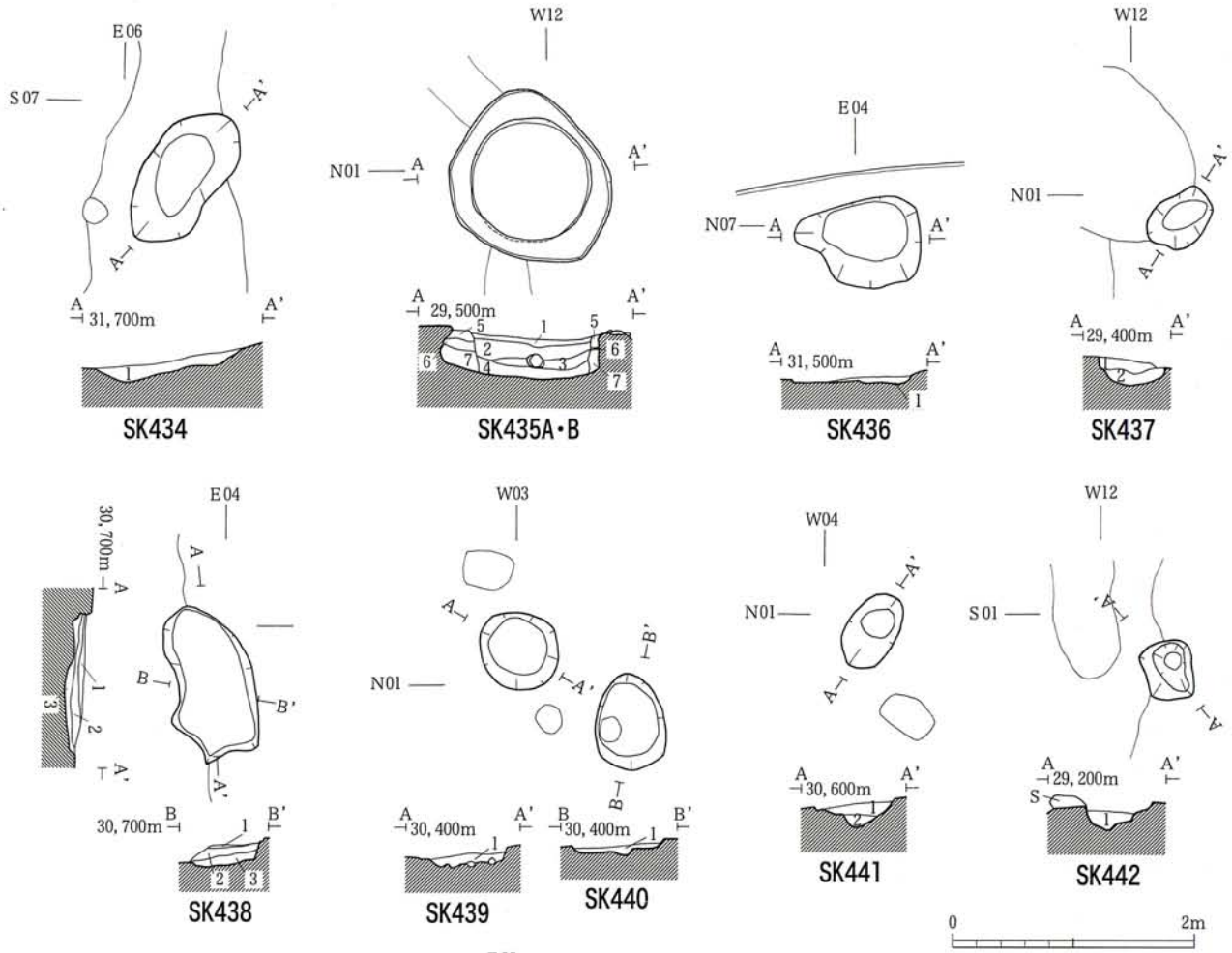
【出土遺物】遺物は出土していない。

SK440土壙

【位置】Ａ区、ほぼ中央よりやや西寄りに位置する。

【検出面・重複】地山面で確認された。重複はない。

【平面形・方向・規模】平面形は円形を呈する。規模は径64cm、深さ15cmを計る。



層No.	土　　色	土　性	備　　考
SK434			
1	にぶい黄橙色(10YR4/3)	シルト	地山礫を多量に含む。しまりなし。
SK435 A・B			
1	暗灰黄色(2.5Y4/2)	シルト	酸化鉄、地山粒、マンガン粒、遺物片、石を含む。
2	灰黄褐色(10YR4/2)	粘土質シルト	酸化鉄、マンガン粒、地山粒を含む。
3	褐灰色(10YR4/1)	粘土	酸化鉄、マンガン粒、地山粒を含む。
4	褐灰色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄、マンガン粒、地山粒、炭化物を含む。
5	暗灰黄色(2.5YR4/2)	粘土質シルト	酸化鉄、マンガン粒、地山粒を含む。しまりあり。
6	灰黄褐色(10YR5/2)	砂質粘土	酸化鉄、マンガン粒、地山粒を含む。しまりあり。
7	褐灰色(7.5YR4/1)	粘土	マンガン粒、地山粒を含む。しまりなし。
SK436			
1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	酸化鉄、マンガン粒、地山粒、炭化物、焼土を含む。
SK437			
1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	粘土質シルト	酸化鉄、マンガン粒を含む。
2	暗褐色(10YR3/3)	粘土	酸化鉄、マンガン粒、地山粒を含む。
SK438			
1	灰褐色(5YR5/2)	シルト	粘性なし、しまりあり、地山粒を含む。
2	にぶい黄褐色(10YR6/3)	シルト	粘性なし、しまりあり、地山粒を含む。 地山小ブロックを含む。
3	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	粘性なし、しまりあり、地山粒を含む。 地山小ブロックを含む。
SK439			
1	にぶい黄橙色(10YR6/3)	シルト	地山粒を少量含む。
SK440			
1	にぶい黄橙色(10YR6/3)	粘土質シルト	均質。
SK441			
1	灰褐色(7.5YR5/2)	シルト	均質。炭化物粒を若干含む。
2	にぶい黄橙色(10YR6/3)	砂質シルト	地山小ブロックを少量含む。
SK442			
1	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	地山粒、マンガン粒を含む。
SK443			
1	暗褐色(10YR3/3)	粘土	地山粒、マンガン粒を含む。
SK455			
1	褐灰色(7.5YR6/5)	シルト	地山粒を多量に含む。

第15図　SK434～443・455土壙

【堆積土】１層のみ確認された。

【壁・底面】底面は起伏があり、壁は直線的に開きながら立ち上がる。

【出土遺物】遺物は出土していない。

SK441土壙

【位置】Ａ区、北西隅付近に位置する。

【検出面・重複】地山面で確認された。重複はない。

【平面形・方向・規模】平面形は楕円形をなし、その長軸方向はN－32°－Eである。規模は長軸68㎝、短軸43㎝、深さ24㎝を計る。

【堆積土】２層に分けられ、いずれも自然堆積土である。

【壁・底面】底面は船底状にくぼみ、壁は南側はゆるやかに開き、他は比較的急に立ち上がる。

【出土遺物】遺物は出土していない。

SK442土壙

【位置】Ｂ区、ほぼ中央付近に位置する。

【検出面・重複】地山面で確認された。SX457と重複しており、これより新しい。

【平面形・方向・規模】平面形は隅丸長方形を呈するが、一段下げると不定形になる。その長軸方向はN－９°－Wである。規模は長軸50㎝、短軸40㎝、深さ24㎝を計る。

【堆積土】１層のみ確認された。

【壁・底面】底面、壁面とも起伏があり一定していない。

【出土遺物】図示できる遺物はないが、堆積土より中世の無釉陶器片１点、土師器片12点、須恵器片１点、赤焼き土器片１点が出土している。

SK443土壙

【位置】Ｂ区、南半のやや東寄りに位置する。

【検出面・重複】地山面で確認された。重複はない。

【平面形・方向・規模】平面形は不整楕円形をなし、その長軸方向はN－45°－Eを計る。規模は長軸57㎝、短軸39㎝、深さ35㎝を計る。

【堆積土】１層のみ確認された。

【壁・底面】断面形はＵ字形を呈する。底面はほぼ平坦で、壁は内弯ぎみに立ち上がる。

【出土遺物】図示できる遺物はないが、堆積土より土師器片１点、須恵器片１点、古代の平瓦片１点が出土している。

SK455土壙

【位置】Ａ区、中央付近のやや南寄りに位置する。

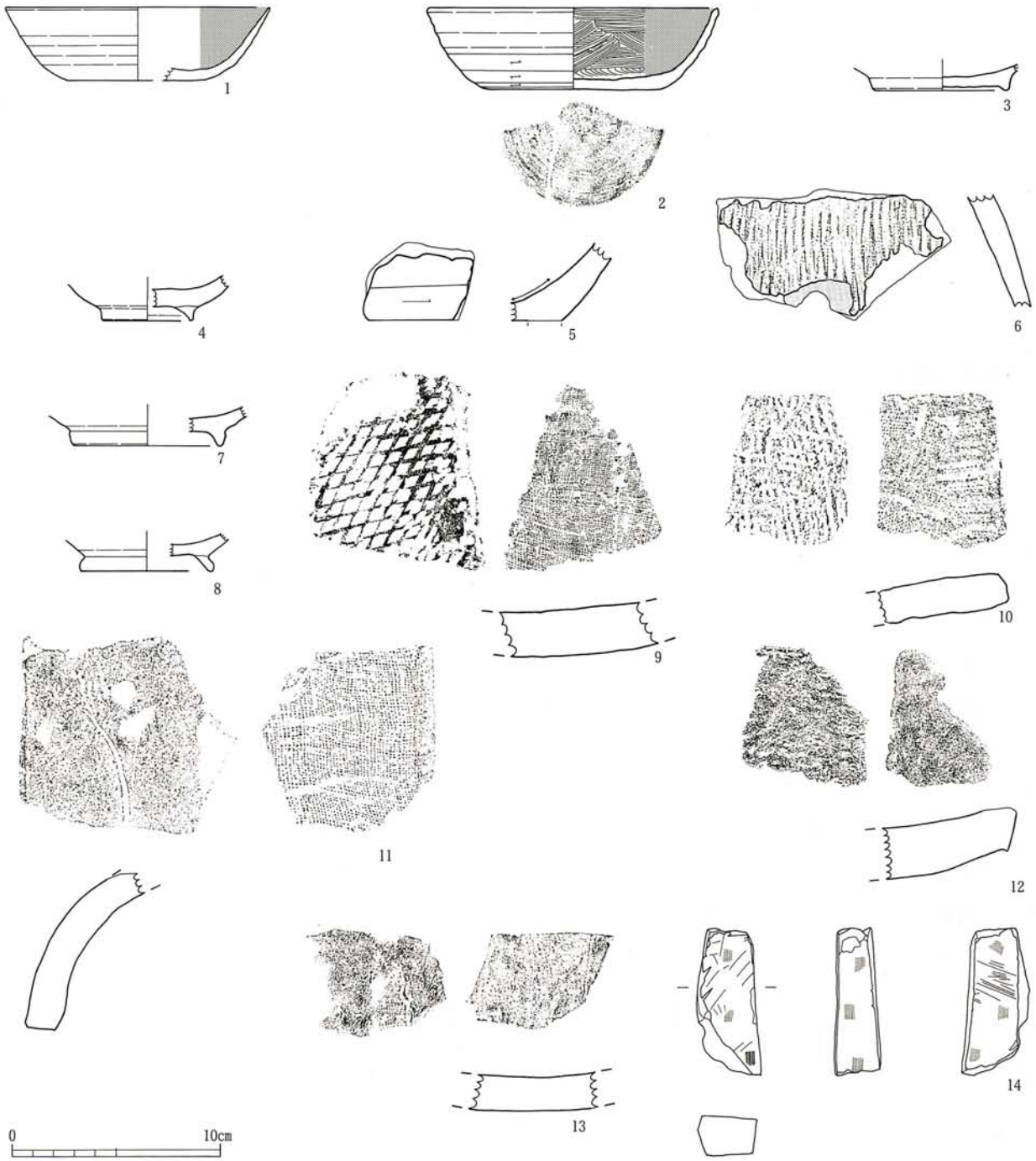
【検出面・重複】地山面で確認された。SI430竪穴住居跡、SD444溝跡と重複しており、それらより古い。

【平面形・方向・規模】平面形は隅丸方形を呈していたと思われ、その方向はN－１°－Eである。規模は西辺で1.85㎝、深さ14㎝を計る。

【堆積土】１層のみ確認された。

【壁・底面】底面は起伏があり、壁と底面の境は明瞭でない。

【出土遺物】遺物は出土していない。



単位：cm

番号	種別	器種	地区・層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考	登録番号
1	土師器	杯	A区 L－Ⅱ	ロクロナデ	ヘラミガキ、黒色処理	1/4	12.8	6.6	3.5		4
2	土師器	杯	B区 L－Ⅴ	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	1/5	14.0	8.2	3.9	写真図版６－２	2
3	赤焼き土器	高台付杯	B区 L－Ⅳa	ロクロナデ	ロクロナデ	底部		6.4			14
4	灰釉陶器	碗	B区 L－Ⅳa	ロクロナデ	ロクロナデ	体～底		(4.2)			77
5	陶器	擂鉢	B区 L－Ⅳa	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	体～底		(9.8)		産地 東海、年代 中世	99
6	須恵器	甕	B区 L－Ⅳb	平行叩き（穿孔あり）	ロクロナデ、摩耗痕あり	破片					98
7	灰釉陶器	碗	B区 L－Ⅳb	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	体～底		7.1			21
8	灰釉陶器	碗	B区 L－Ⅳb	ロクロナデ	ロクロナデ	体～底		6.4			19

番号	種別	地区・層位	特徴	備考	登録番号
9	平瓦	B区 L－Ⅳa	【凹面】斜め格子タタキの重複 【凸面】布目→布目	ⅠC-b類	34
10	平瓦	B区 L－Ⅲ	【凹面】布目→ナデ、工具痕 【凸面】縄タタキ目→タタキのつぶれ	ⅡB-a類	39
11	丸瓦	B区 L－Ⅲ	【凹面】（粘土紐痕）布目 【凸面】縄タタキ→ロクロナデ	Ⅱ類	52
12	平瓦	B区 L－Ⅲ	【凹面】布目→ナデ 【凸面】タタキ→凹型台圧痕	ⅡB-b類	53
13	平瓦	B区 L－Ⅲ	【凹面】ナデ 【凸面】ナデ	ⅠA類	49

番号	種別	地区・層位	特徴	長さ	幅	厚さ	重量(g)		登録番号
14	砥石	B区 L－Ⅲ	4面砥面あり	7.0	2.9	2.1	64.7		95

第16図　基本層出土遺物

(4)ピット群

SP456

A区北半のほぼ中央付近、地山面で確認された。全部で13個のピットが検出された。この内1個はSX453と重複し、これより新しい。その中で柱痕跡が認められたのは2個であるが、配置状況に規則性は認められなかった。ピットは径が15cm～20cmのものと、35cm～60cmのものとがある。深さは10cm～40cmまであり、一定していない。遺物は出土していない。

(5)性格不明遺構

SX454

【位置】A区、中央の北壁付近に位置する。

【検出面・重複】地山面で確認された。ピット群の1個と重複しており、これより古い。

【平面形・方向・規模】コーナーが丸みを持った]状を呈している。規模は南北が1.4m前後、東西が1.2m前後、深さは2cm～14cmを計る。

【堆積土】1層のみ確認された。

【壁・底面】底面は凹凸が激しく、規則性はみられない。壁はやや内弯ぎみに立ち上がる。

【出土遺物】遺物は出土していない。

3. 遺構外出土の遺物（第16図）

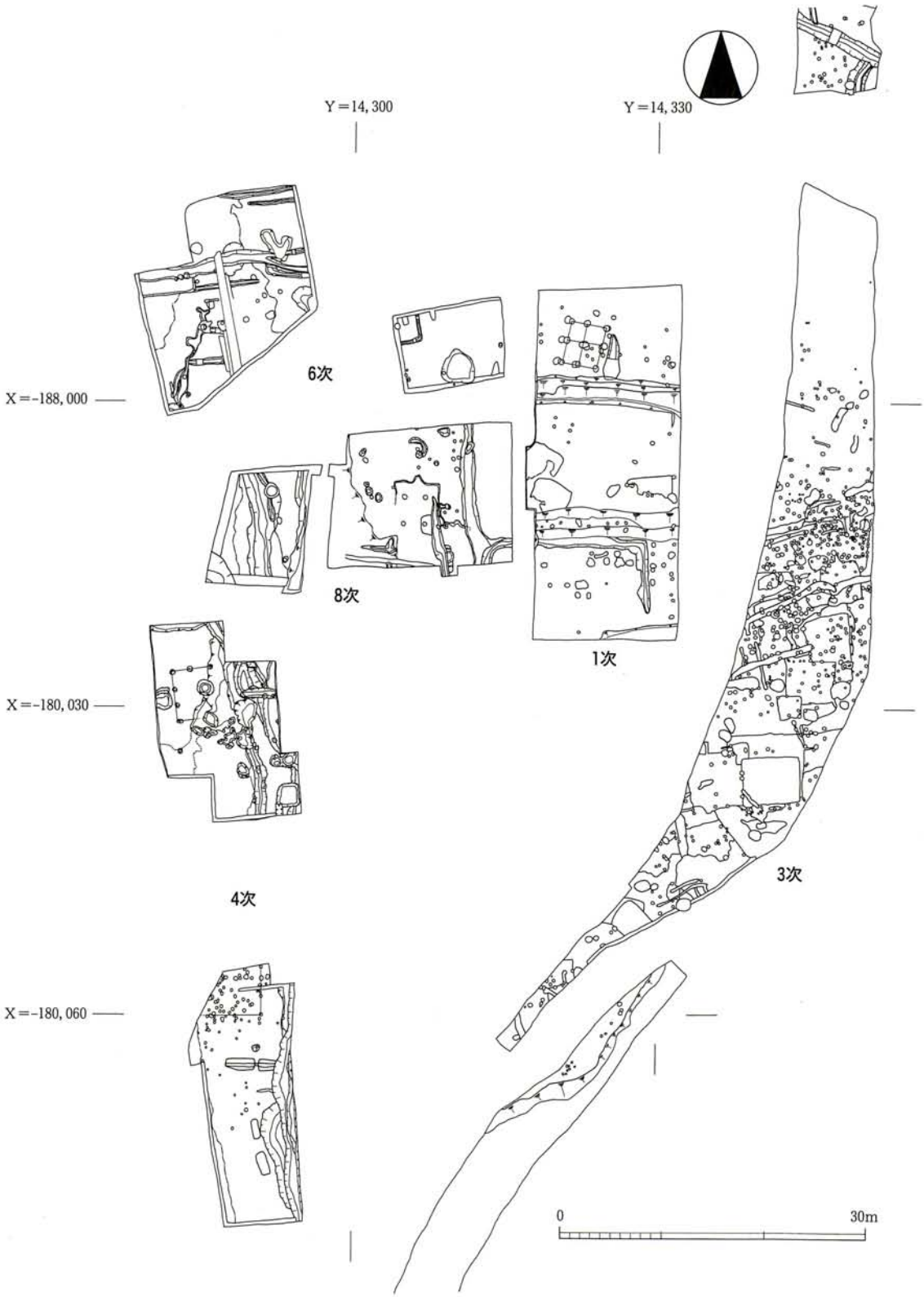
基本層（Ⅰ～Ⅴ層）および攪乱土より各種の遺物が出土している。基本層からは土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器、緑釉陶器、古代の瓦の遺物のほか、Ⅳa・Ⅳb層には中世の遺物が、また、Ⅱ層より上層には近世～近代の陶磁器が混在している。なお、Ⅴ層からは土師器杯1点（第16図2）が出土したが、その特徴より9世紀前半代のものと考えられる.これらのうち図示できたのは14点である。

Ⅳ. 考察とまとめ

今回の調査では古代から近世までにわたる遺構・遺物を検出している。以下時代ごとに若干の考察を加える。

1. 古代

古代の遺構としては、A区でSI430・431・432・433竪穴住居跡が発見されている。各住居跡からは僅少な遺物しか出土していないが、その年代的な位置付けを考えてみる。まず、竪穴住居跡出土の大半の土師器は破片を含めていずれも製作にロクロを使用していることから、表杉ノ入式期に比定でき，平安時代に位置付けられる。そして、そのなかでも多賀城周辺で10世紀前葉前後に出現するとされている赤焼き土器（須恵系土器）を含まないことから、それ以前のおおむね9世紀代と抑えることができる。さらに図示できたSI430住居跡出土の土師器坏は器高が低く、口径に対して底径の比が0.55と大きいもので、底部は再調整が施されていることから、9世紀の前半代、下っても中葉頃と考えられる。また、SI432住居跡出土の土師器甕は、体部にロクロ調整以前のタタキ成形痕がみられるもので、このような特徴を持つ甕は多賀城内では、9世紀前半とされている第62次調査SI2153竪穴住居跡出土土器群（註1）から9世紀第3四半期とされている五万崎地区のSK2272土壙出土土器群（註2）の中に見られる。したがって、本例も同様の幅を持った年代を考えることができる。以上のことから、SI430・432住居跡の年代は9世紀前半～中葉頃と推



第17図　本次調査区と周辺調査区の遺構配置図

定される。

今回検出した4軒の竪穴住居跡は、いずれも位置関係からみると重複しているのであるが、直接的な切り合いを確認できたのはSI430住居跡とSI433住居跡のみで、他はその前後関係を把握できなかった。

2. 中世

中世の遺構としては、B区で検出したSD448・450・451・452溝跡、SK442土壙があげられる。おおよそ谷部を南北の方向に走るもの（SD448・450・451）と、西に屈曲するもの（SD452）とがある。これらの溝は、今回の調査区の南側に位置する第4次調査区で検出されている南北方向の溝群（SD383）と関連しているものとみられ、自然地形を利用した区画溝の可能性も考えられよう。

3. 近世

近世の遺構としては、A区のSD444・445・446溝跡、B区のSD447・453溝跡、SK435土壙があげられる。A区のピット群も不確実ながらこの時期に伴う可能性がある。B区の谷部を南北方向に走るSD448溝跡に連続すると考えられる溝が第4次調査区でも検出されている。また、SD445溝跡は屈曲して東へと延びているが、隣接する第1次調査区でもこの延長上の溝を検出しており、およそ一辺（北辺で）16mの方形区画になるものと推察される。

西沢遺跡における古代の遺構は、これまでの調査成果から，奈良時代のものはごく稀で、そのほとんどが平安時代に入ってからのものである。このような傾向は、西側に隣接する多賀城内の大畑地区官衙が平安時代になってから本格的に整備されるのと時期を同じくしており、また、両地区における鍛冶工房群の存在からしても、陸奥国府多賀城の強い影響下のもとに推移していったことが考えられる。

〔註〕

註1　宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1992』 1993

註2　宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1994』 1995

［引用・参考文献］

宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城政庁跡　本文編』 1982

宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1991』 1992

宮城県多賀城跡調査研究所『下伊場野窯跡群』多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第19冊　1994

多賀城市教育委員会『西沢遺跡－第1次調査報告書－』「山王遺跡ほか」多賀城市文化財調査報告書第29集　1993

多賀城市教育委員会『西沢遺跡－第4次調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第51集　1998

多賀城市教育委員会『西沢遺跡－第6次調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第53集　1999

村田晃一『土器からみた官衙の終末－東北地方の場合－』「古代官衙の終末をめぐる諸問題」第3回東日本埋蔵文化財研究会資料　1994

V.　西沢遺跡第８次調査における花粉分析

古環境研究所

1. はじめに

種子植物やシダ植物等が生産する花粉・胞子は、分解されにくく堆積物中に比較的良好に保存される。花粉は、風媒花植物であれば空中に飛散し、虫媒花植物ならば昆虫により運搬され、多くの場合、地表に落下後土壌中あるいは雨水や河川で運搬され水域に堆積する。花粉分析では、堆積物より抽出した花粉の種類構成や相対比率から地層の対比を行ったり、植生や土地条件などの古環境や古気候の推定が行われる。一般には、比較的広域に分布する水成堆積物を対象として、堆積盆単位などのやや広域な植生や環境の復元に用いられるが、考古遺跡では、堆積域の狭い遺構などの堆積物から、局地的な植生や環境の復元にも用いられている。

2. 試料

分析試料は、Ｂ区南壁セクションで採取したSD452溝跡堆積土の上層と下層の２点である。

3. 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

1) ５％水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。

2)水洗した後、0.5㎜の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。

3)25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。

4)水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：１濃硫酸のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す。

5)再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。

6)沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離（1500rpm、２分間）の後、上澄みを捨てるという操作を３回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉(1973)および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村（1974、1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

4. 結果

(1)分類群

出現した分類群は、樹木花粉15、樹木花粉と草本花粉を含むもの２、草本花粉15、シダ植物胞子３形態の計77である。これらの学名と和名および粒数を表１に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亜属、スギ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属－アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、トチノキ、ブドウ属、モクセイ科、ニワトコ属－ガマズミ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科、マメ科

〔草本花粉〕

イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、ギシギシ属、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、フウロソウ属、セリ亜科、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

(2)花粉群集の特徴

SD452溝跡の上層と下層は、樹木花粉より草本花粉および樹木花粉と草本花粉を含む分類群の占める割合が高い。クワ科－イラクサ科が最も高く、ヨモギ属、キンポウゲ属の草本花粉の出現率が高い。下層ではキンポウゲ属の出現率が高く、上層ではクワ科－イラクサ科が増加し、イネ科、アカザ科－ヒユ科、セリ亜科が微増する。樹木花粉は、ニワトコ属－ガマズミ属がやや高率に出現するほかは低率である。

5. 花粉分析からみた植生と環境

以上の結果から、SD452溝跡およびその周辺は、ヨモギ属やキンポウゲ属の草本とクワ科－イラクサ科、ニワトコ属－ガマズミ属が多く生育していた。ニワトコ属－ガマズミ属とクワ科－イラクサ科は、生態上から、二次林性の低木であるニワトコと荒地に生えるカナムグラが考えられ、ヨモギ属は人為地に分布する人里植物である。これらのことから、SD452溝跡およびその周辺は、人為地や荒地に分布するヨモギ属やカナムグラ（クワ科－イラクサ科）の草本や二次林性の低木であるニワトコ（ニワトコ属－ガマズミ属）が生育し、極めて人為性の高い環境であり、高木が分布せず森林は分布していなかったと推定される。キンポウゲ属はタガラシやウマノアシガタなどの水田雑草でもある水生植物が考えられ、溝内にはこれらが生育していたとみなされる。

6. まとめ

西沢遺跡第８次調査のＢ区南壁セクションで採取したSD452溝跡堆積土の花粉分析の結果、周辺は、人為地や荒地に分布するヨモギ属やカナムグラ（クワ科－イラクサ科）の草本と二次林性の低木であるニワトコ（ニワトコ属－ガマズミ属）が主要に分布し、極めて人為性の高い環境であった。また、周辺には高木

が分布せず、森林は分布していなかったと推定される。溝内にはタガラシやウマノアシガタ（キンポウゲ属）などの水田雑草でもある水生植物が生育していた。

参考文献

中村純（1973）花粉分析．古今書院，p.82－110.
金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248－262.
島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60p.
中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.
中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として．第四紀研究，13，p.187－193.
中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，p.21－30.

表1　西沢遺跡第8次調査B区南壁セクションSD452溝跡における花粉分析結果

分類群		SD452溝跡	
学名	和名	上層	下層
Arboreal pollen	樹木花粉		
Pinus subgen.Diploxylon	マツ属複維管束亜属	2	
Cryptomeria japonica	スギ	1	
Alnus	ハンノキ属	2	1
Betula	カバノキ属	2	
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属－アサダ	1	2
Castanea crenata	クリ	2	2
Castanopsis	シイ属	3	1
Fagus	ブナ属	2	1
Quercus subgen.Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	1	2
Quercus subgen.Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属		2
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属－ケヤキ	3	1
Aesculus turbinata	トチノキ	1	
Vitis	ブドウ属		1
Oleaceae	モクセイ科		10
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属－ガマズミ属	54	39
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉		
Moraceae-Urticaceae	クワ科－イラクサ科	152	84
Leguminosae	マメ科	1	
Nonarboreal pollen	草本花粉		
Gramineae	イネ科	33	14
Oryza type	イネ属型		1
Cyperaceae	カヤツリグサ科	10	2
Monochoria	ミズアオイ属		1
Rumex	ギシギシ属	2	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科－ヒユ科	18	4
Caryophyllaceae	ナデシコ科	2	1
Ranunculus	キンポウゲ属	21	123
Cruciferae	アブラナ科	6	2
Geranium	フウロソウ属		1
Apiodeae	セリ亜属	11	2
Lactucoideae	タンポポ亜科	1	
Asteroideae	キク亜科	3	3
Xanthium	オナモミ属	1	1
Artemisia	ヨモギ属	82	156
Fern spore	シダ植物胞子		
Monolate type spore	単条溝胞子	1	
Trilate type spore	三条溝胞子	4	1
Arboreal pollen	樹木花粉	74	62
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	153	84
Nonarboreal pollen	草本花粉	190	311
Total pollen	花粉総数	417	457
Unknown pollen	未同定花粉	6	14
Fern spore	シダ植物胞子	5	1
Helminth eggs	寄生虫卵	(－)	(－)
	明らかな消化残渣	(－)	(－)

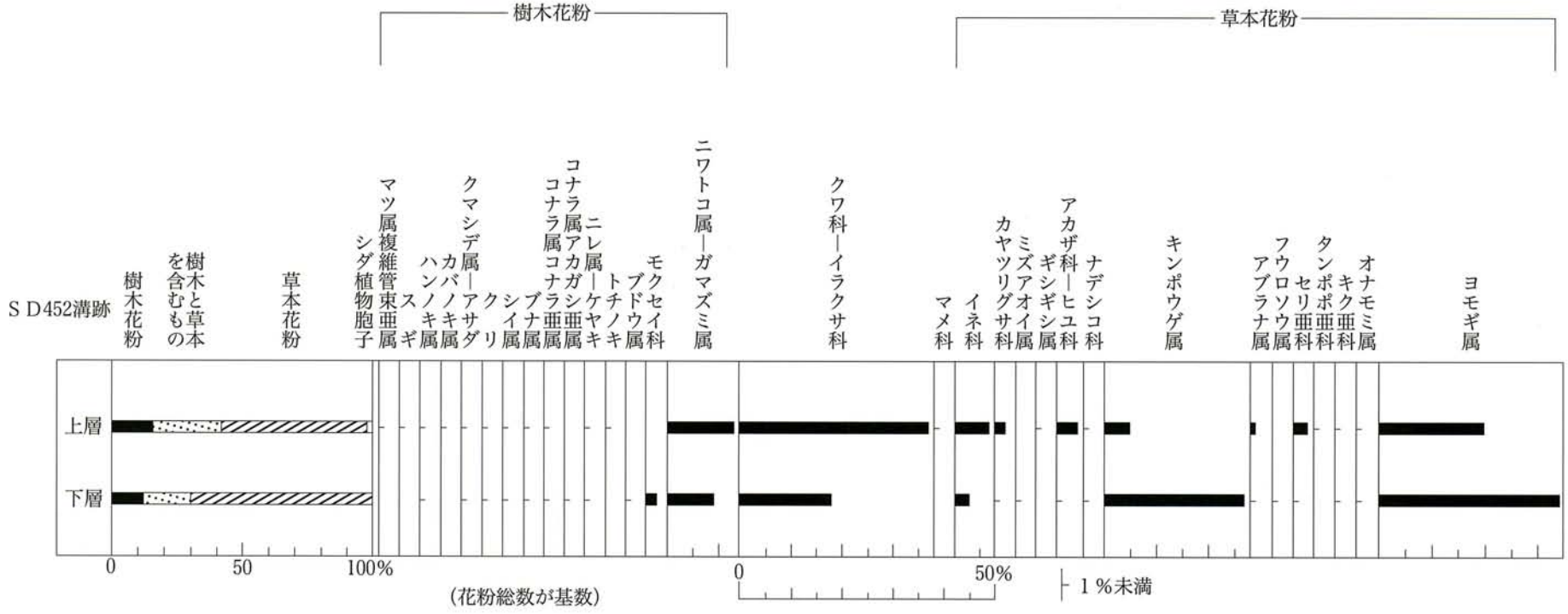
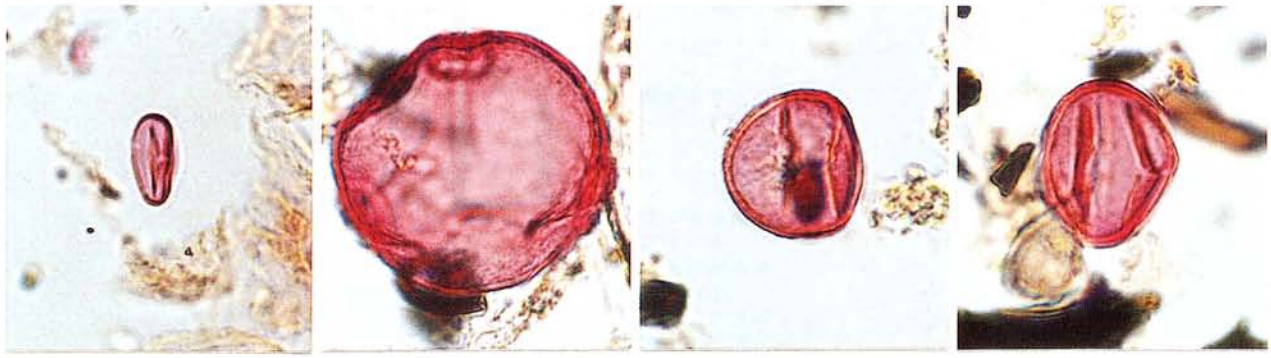
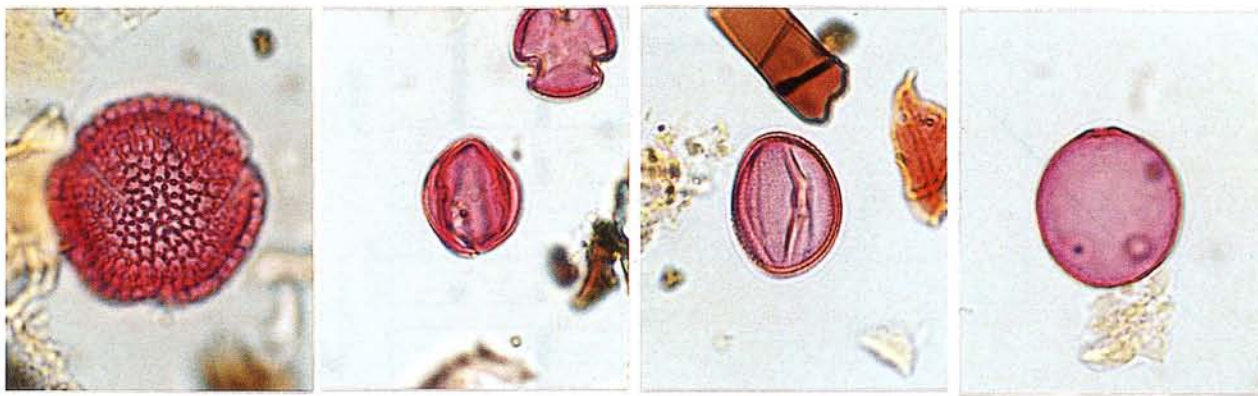


図1　西沢遺跡第8次調査B区南壁セクションSD452溝跡における花粉ダイアグラム



1　クリ　　2　ブナ属　　3　コナラ属コナラ亜属　　4　コナラ属アカガシ亜属



5　モクセイ科　　6　ブドウ属　　7　ニワトコ属―ガマズミ属　　8　クワ科―イラクサ科

9　イネ科　　10　イネ属型　　11　カヤツリグサ科　　12　ミズアオイ属

13　アサガ科―ヒユ科　　14　キンポウゲ属　　15　ナデシコ科　　16　ヨモギ属

―― 10μm

花粉遺体の顕微鏡写真

写 真 図 版

写真図版１　調査区周辺の空中写真

この空中写真（平成５年撮影）は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院撮影の空中写真を掲載したものです。
（承認番号　平12東複第87号）

A区遺構検出状況
（北より）

A区遺構完堀状況
（北より）

A区遺構完堀状況
（南西より）

A区
SI430竪穴住居跡完掘状況
（南より）

A区
SI431竪穴住居跡完掘状況
（西より）

A区
SI432竪穴住居跡完掘状況
（南より）

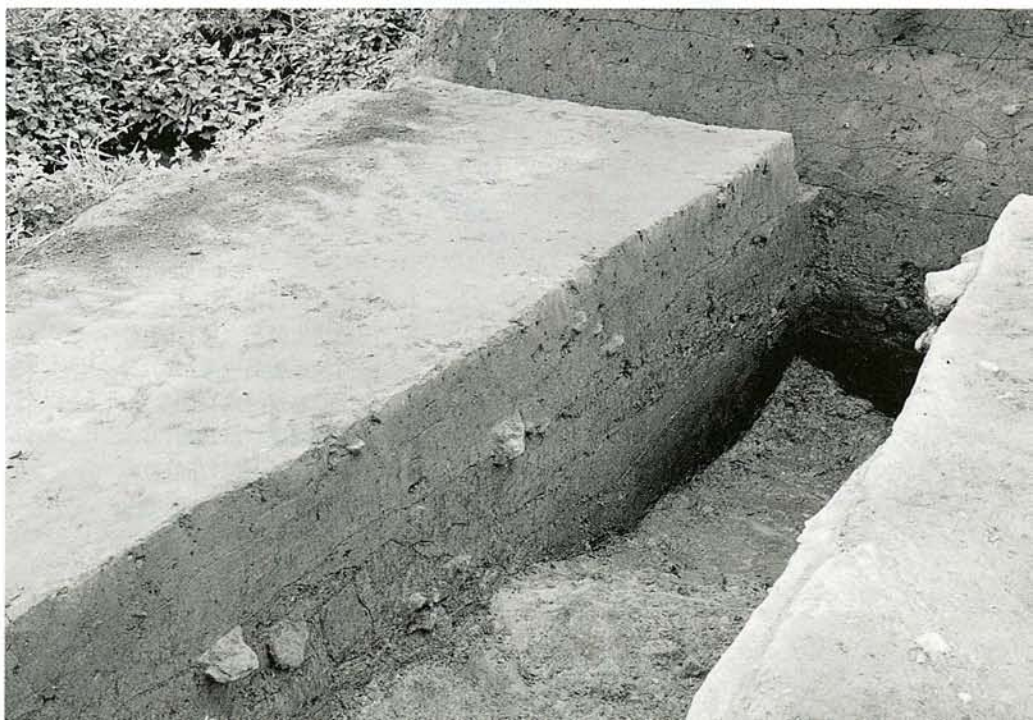
A区
SI432竪穴住居跡カマド完掘状況
（南より）

A区
SI432竪穴住居跡・ピット１内土師器
蓋出土状況（左）
SI433竪穴住居跡・煙道部完掘状況
（右・西より）

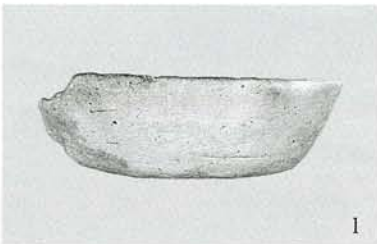
A区
SD445溝跡完掘状況
（東より）

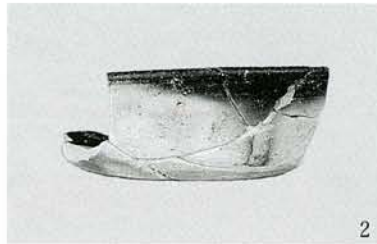
B区遺構完掘状況
（北より）

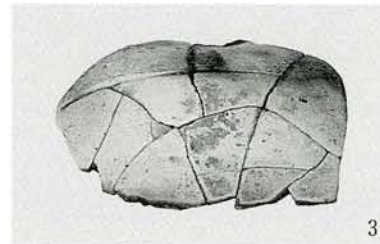
B区北壁土層断面
（南より）

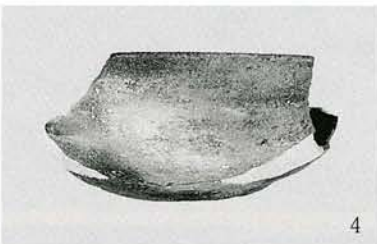


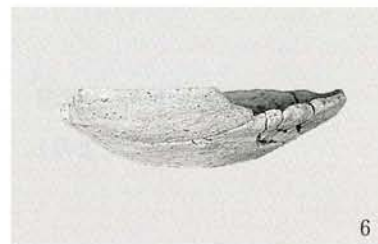
B区SD452溝跡と土層断面
（北東より）

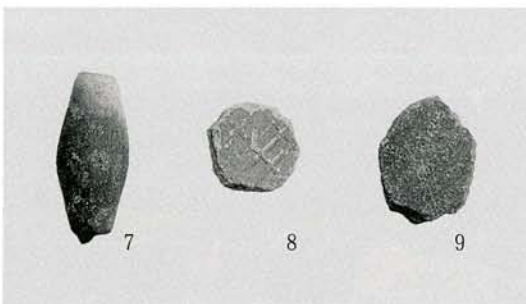


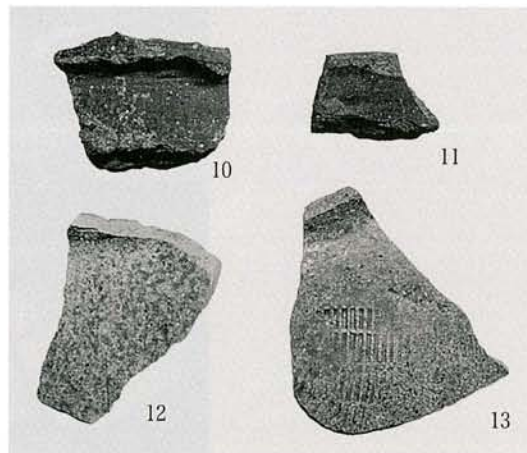


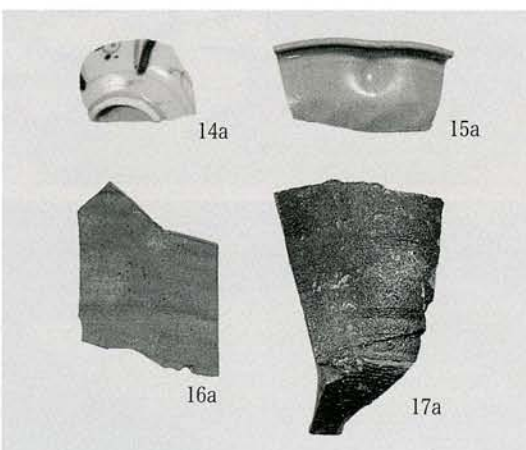


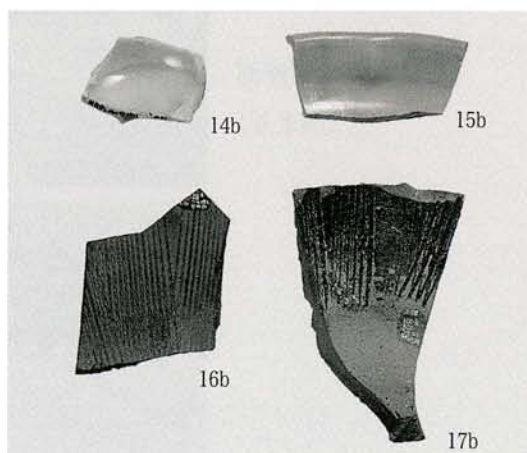












1　土師器杯（第７図１）
2　土師器杯（第16図２）
3　土師器蓋（第９図１）
4　赤焼き土器杯（第13図２）
5　かわらけ（第13図７）
6　赤焼き土器杯（第13図９）
7　土錘（第13図13）
8　円盤状土製品（第13図14）
9　円盤状土製品（第13図12）
10　中世陶器甕（第12図５）
11　中世陶器甕（第13図10）
12　中世陶器甕（第12図12）
13　中世陶器甕（第13図11）
14　近世陶器椀（第12図１）
15　近世陶器鉢（第12図３）
16　近世陶器摺鉢（第12図２）
17　近世陶器摺鉢（第12図４）

写真図版６　出土遺物

報告書抄録

ふりがな	にしざわいせき
書名	西沢遺跡
副書名	第8次調査報告書
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第58集
編著者名	相沢清利、車田　敦
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター
所在地	〒985-0873　宮城県多賀城市中央二丁目27番1号
発行年月日	西暦2000年3月24日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
西沢遺跡（にしざわいせき）（第8次）	多賀城市市川字伊保石地内（たがじょうしいちかわあざいぼいしちない）	18	017	38度18分10秒	141度59分49秒	19990708～19990913	400㎡	個人住宅建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西沢遺跡（第8次）	集落	平安	竪穴住居跡	土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦	
		中世	溝跡	青磁、白磁、無釉陶器	
		近世	溝跡、土壙	磁器、陶器	

多賀城市文化財調査報告書第58集

西　沢　遺　跡

―第８次調査報告書―

平成12年３月24日発行

編集　多賀城市埋蔵文化財調査センター
　　多賀城市中央二丁目27番１号
　　電話　（022）　368－0134
発行　多賀城市教育委員会
　　多賀城市中央二丁目１番１号
　　電話　（022）　368－1141
印刷　今野印刷株式会社
　　仙台市若林区六丁の目西町４－５
　　電話　（022）　288－6123